

婦人止學毛



第二卷
第四號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行	毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行
定價	一冊金拾錢○六冊前金五拾七錢○拾貳冊前金壹圓拾錢○郵税各一冊一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。
入會者	は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレイベル會あて申し込まれば雜誌は無代價にて送呈すべし
購讀者	は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取入金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限り十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上にて附し速御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ
編輯	に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレイベル會あてのこと
廣告料	一頁十圓半頁五圓

明治三十五年四月二日印刷
同 年四月五日發行

不許複製

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地

大賣捌所 東京東京堂●同東海信文會社●同北隆館

婦人と子ども第二卷第四號目次

卷首

幼稚園保姆合唱の歌

子ども

骨物かたり●帽子と象●摺み方●狼奇談●「笑ひの種●考へ物●謎

家庭

ないしよといふこと.....林ふみ子
 傳染病.....醫學士.....長瀬復三郎
 幼兒の改良服.....星井泰次郎
 今昔いろは料理.....石名次郎
 或母の日記.....無名氏

學術

夢のはなし.....東基吉
 露の色及虹.....京都圖南亭
 鐵道の話.....菊南亭

史傳

津崎矩子.....下村三四吉

文苑

狂女.....鷺くめ子
 花見.....東くめ子

朽ちせぬ花.....つね
 海外にある友に.....東柏會同
 折にふれて.....同くめ子

説林

保育法の改良.....記
 小兒の發達に注意して御覽なさい.....念生者

寄書

色に對する子供の嗜好.....長野飯島八千治
 子供の躰け方につきて.....相模平岩繁
 備後の手鞠歌.....三河近藤と子
 三河の鞠歌.....三河近藤と子

雜錄

四月の天地.....川口孫次郎
 結婚論.....野本生
 灌佛會.....一せの三
 寡婦と愛兒.....松二の三
 若葉集.....松二の三

彙報

學校、集會●筆の雫●海外彙報●新刊紹介●會報●會員名簿

幼稚園保姆合唱の歌

客員 細川潤次郎君作歌
同 奥好 義君作曲

(一) 幼稚の園生はいかなるそのふこゝろに

千草の種まくころ。蒔きては培ひ月日を

経なは色香も妙なる花こそ咲かめ。

(二) 長閑けき春への風をも吹かせ。静けき春

への雨をも降らせ。二葉のなでして榮行

く園生。まもるも嬉しきこの身の勤め。

幼稚園保母合唱の歌



(一) えうちのそのふはいかなるそのふ
(二) ノドケキハルベノカゼヲモフカセ



こころにちぐさのたねまくところ
シヅケキハルベノアメヲモフラセ



まきではつちかひつきひをへなほ
フタバノナデシコサカユクソーノフ



いろかもたへなるはなこそさかめ
マモルモウレシキノミノツトメ

會 告

本月二十日午後一時女子高等師範學校附屬幼稚園に於て左の順序により本會第七回總會相開き申すべく候に付き萬障御排除御出席相なりたく候

開會の辭

會務報告、幹事改選

休憩(此間陳列品縱覽)

演說

實驗談

餘興

隨意談話(菓果)

唱歌(幼稚園保姆合唱の歌)

注意

幹事は在京會員中より五名を選擧すべく本誌名簿中○印を附しあるは今月を以て退職すべく○印を附しあるは今後引續き留任すべき人なり。當日陳列すべき爲め幼兒の成績品及幼兒教育上の參考品等成るべく多數御送附相なりたく、但し宛は本會宛て、到達期限は來る十七日までとす。

明治卅五年四月五日

女子高等師範學校附屬幼稚園内

フ
レ
ー
ベ
ル
會

フレールベル會規則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレールベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員ヲラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ獻出スベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ、
 - 一 總會 毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參考品幼兒成績物展覽會、會務ノ報告、幹事ノ選舉等ヲナス
 - 二 會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
 - 三 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等ヲナス
 - 四 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
 - 五 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
 - 六 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 一 會長 會務ヲ總理ス
 - 二 幹事 十人 會長ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 三 評議員 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 四 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
- 第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ケ年トス但シ毎年半数ヲ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更スルコトヲ得ス

●四月一日第二學期始業

女生徒募集

東京市京橋區鈴木町十一番地
石井割烹教場

婦人と子ども

第貳巻第四號

(明治三十五年四月五日)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

骨ものがたり(つゞき)

やまとの翁

誰の手にも合わなかつた所の
 あれ程の古猪をば
 苦もなく射殺して、退治したもんですから、美彦わ
 大喜び、これも偏えに、神様が自分のすなをなのを
 恵んで下さって弓と矢とを授けて下さったからだ

思つて、非常にありがたがつて、さうそれから直ぐ、この野猪を殿様の處え持つて行つて御目にかつよーとゆーので、大な野猪の死骸を脊負つてぼつく山を下りて歸りかけました。

處がだんくで行つて、山の麓の處え來た所が、そこに一軒の酒屋があつて、そこで兄さんの猛夫が一人でグイくとお酒を飲んで居る、よもや弟が行つたつてあの怖ろしい古猪を退治することか出來やしまい、今にこの兄が一番に退治をして、殿様のご褒美を頂いて見せるなど、至極太平樂をい

っで居った。そこを以て弟の美彦が、野猪を脊負
 て、勇ましくやってきたものだから、猛夫わ屹驚し
 て、もー羨しーやら、妬ましーやらで堪らなくなつ
 た。

けれども面にわそんな風わ些も見せない、態
 と大變に嬉しー様な風をして、

猛夫「やー美彦、お前わ己の弟だけあつて中々強い、
 よーまー、この古猪が苦もなく、退治が出来たもの
 だねー、さー、こゝえ來てお酒でも、一盃飲んで、
 休みなさい」

こーい ったもんだから、美彦もまさか、兄さんが
 悪企があるーとも思わない、眞實に喜んでいつて呉
 れたのだと思ひましたから、

美彦「さー兄さん これもね、白い髯のお翁さんが出
 て來て、弓と矢とを呉れたもんですから、全くの所

夫で退治ができたのです』
 といつて、悉しく猪退治の物語をしました。

慈者の猛夫わ、前から黙つて美彦のお話を聞いて
 居りましたが、もとより腹に一物がありますから、
 態としきりに感心をした風をして、無暗に弟にお酒

を勧めて飲ませる、そしてだんくど日が暮れるま
 で、美彦を引き留めて居る、美彦は何も知らないで、
 勧められるまゝに、お酒を過して居ると、だんく
 遅くなつてしまつて、さう歸ると猛夫が言つて、
 二人で蓮れだつて其處を出た時分にわ、も一日がズ
 ッポリ暮れてしまつた。

それから兄弟連れだつて、そこを出て暗い山路
 を通つて歸りかかつた所が、夜の事でもあるし、山
 道でもあるから、丸のきり人通りとゆゝものわなく
 つて、實に寂しーことゝいつたら、譬え様がない。



そこで、猛夫わそーッと周回を見廻わしながら一歩下って、弟が猪を脊負して、何心なく前え行く所を、突然後から抜打に刀で斬り付けた。お酒にわ酔して居るし、重いものを脊負って居るし、おまけに後からの不意打だから、身を交すことも出来ない。頭の真中から斬り下げられて、可愛相に美彦わ、「アツ」といったなり殺されて仕舞ったのです。

猛夫わ一人で、「ヘン、甘く行つたな」と獨言しながら、静に地面え穴を掘って、美彦の死骸を見えない

様に埋めて置いて、夫から猪の死骸を自分に脊負
 て、大急ぎで殿様の處へ行つて、自分が猪を退治し
 てこの通り持つて参りましたといつて、お届をしま
 した。

殿様わ御様子を一向にご存じがないから、大變な
 御賞めで、早速猛夫をお取り立てになつて、立派な
 お士にして呉れた。それから、猛夫わ自分の弟め、
 可愛相に同じ様に猪狩りに行つたのだが、と一く
 猪に殺されて仕舞つたのだといつて、皆を欺してお
 ったのです。

けれども悪い者わ、何時までも善くわ行かない。

それから何年か経った後で、一人の百姓が、丁度美

彦の殺された山奥を通りかゝった時、眞白な一本の

骨を拾ったので、何か獣の骨でもあろうと思つて

家え持つて返つて夫を細工して、煙管の吸口に拵ら

えた。處が不思議……實に不思議だ、其煙管で以て煙

草を吸つた所が、其骨が忽ち歌を歌い出したのです。

私の兄さん酷い人、私を殺して骨にして、

私の殺した野猪を、と一く自分の物にした、

怨めしー兄さんや、怨めしー兄さんや

さー大變だ 骨が物言ー出した、獨りで歌をうたい出した、こんな不思議なものわない、これわすぐ殿様に献上しよーとゆーので 早速殿様え持つて出ました。

何だつて骨が物ゆーとゆーのですから、殿様も余程不思議に思し召されて、檢して見ると、やっぱり其通り、處で殿様わ、『ハッ』とお考え附き遊ばされた。『これで見るとあの猛夫とゆー者が、怪しいわいと覺し召されたもんだから、直様猛夫をよび出して、猪狩りの時の弟を殺した事を、お調になつた、所が猛

夫おとこわ中なか々白はく状じようをしなない、そんならとゆいので、彼かの
 骨ほねの煙えん管かんを持もち出だして物ものをいわたしたもんだから、
 さすがの猛たけ夫ぶも隠かくすことが出で来きないで、とーく
 悪わるい事ことを殘のこらず白はく状じようしてしましました。
 そこで殿との様さまわ以もつての外ほかのお怒いかりで、すぐ猛たけ夫ぶの
 首くびを斬きつて殺ころされたが、弟あとうとの美よし彦ひこの方はうは、可か愛あい相せうだ
 とゆいので、埋うまつて居ゐた骨ほねを堀ほり起かこして、立りつ派ぱ
 な墓はかを立たて、お祭まつりをして呉くれましたとさ
 めでたしく

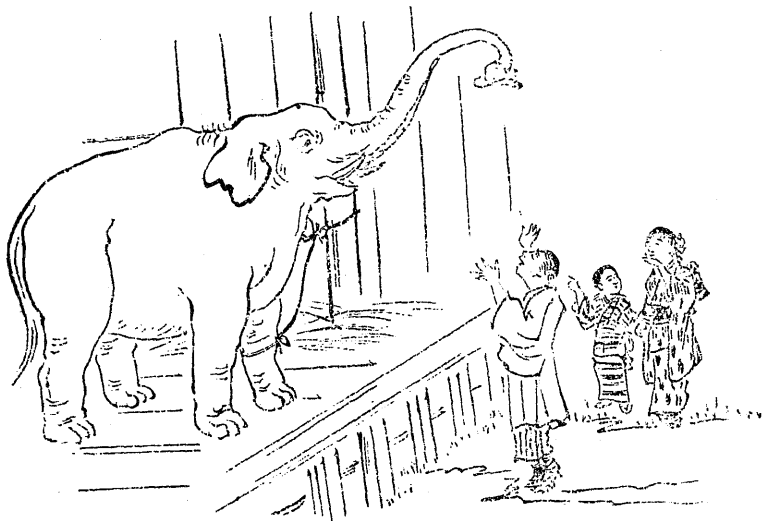
象と子帽子

姉のおはなが、弟の信一をつれて動物園に象をみにゆきました。

大きな象が、小さな目をして、長い鼻をうごかし何かほしそいな顔をして居ります。

それで、一しよに見物をして居つた男が、たもとからパンをだして象の前にさしだしました。

すると象はうれしそ一に、そのパンをとろ一



として長い鼻をのぼし出すと、その男はヒョイとそのパンをひきこめました。

そうして、その男がまたパンをだすと、象はこれをとろ一として鼻をだし、象が鼻をだすとその男は急にその手をひきこめます。

三四へんばかりそれをとろ一としましたあとで象は何かさつたよ一すで、こんどはいくらパン

をさしだしても少しもとろーとしませぬ。

しばらくすぎて、その男が前のことを忘れてしまつて、ふーぜいの見物と話しながら、象をみて居ると、いつの間にか、象はその男の方にちかよつてきて、ふいに鼻をのぼしてきて、忽ちその男のかぶつて居つた、麥わら帽子をとりさりました。

そーして、その男の前に帽子をだして、その男がこれをつかもーとすると、急にひきこめます。さすがの男も、こんどは大變によわつて、なんべん、となくこれをとるかえそーとしました。が、とーとーれしまひになつて、象はその麥わら帽子をさもうまそーにのんでしまいました。

弟の信一はこれを見てうち笑ひながら、
ねーさん象がかつたね

といひますと、姉のおはなは小聲で、

いたづらをしたからよ

といひました

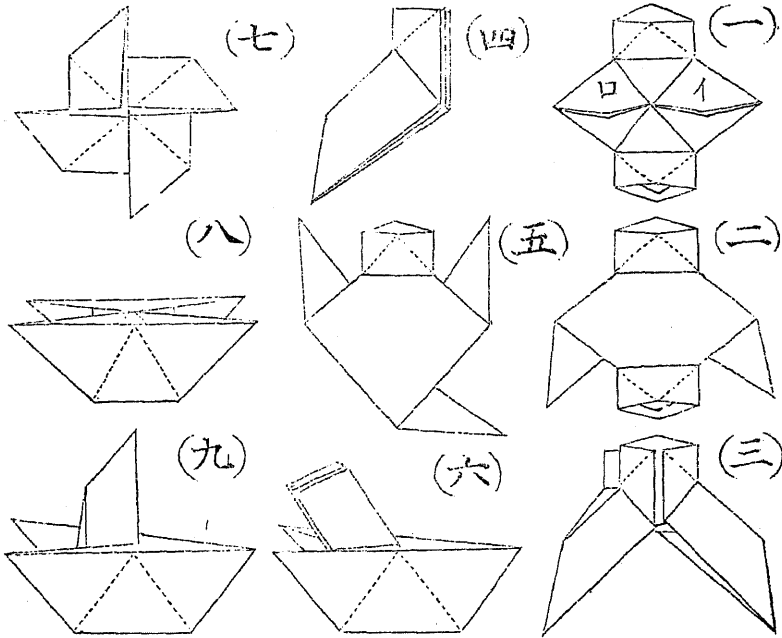
摺み方

今度の摺み方は、前のついで、第一番は燈籠てこさいます、摺み方は車の通りで、輪になつた所、一圖のイとロとの所を裏かえしにして引き出して、二圖のよーにいたすのです。

その次は股引で、燈籠のまんまかゝら、横に二つに折ると出來ます。(第三圖)

次は足袋で、これは股引を、縦に二つに折ると出來ます。(第四圖)

次は鉄砲船で、これは燈籠のよーに三所引き出し、一所残して五圖のよーにし、イロの線の



通りに、二つに折りますと、六圖のよーになりま
す。

又その次は風車、これは鉄砲船の、一所残し
た所をも、引り出して七圖のよーにいたします。

次は二艘船(八圖)、帆掛船(九圖)ですがこれ
は風車を まんなか、ら折ると出来ます。

工夫してこらんなさい。

狼奇談

やまとの翁

翁の御話に出る狼は、時々狐や何かにだまされ
る様な事があって、至極トンマの様ですけど、真
事の處は、どーして、中々馬鹿には出来ない獣で
あります。

これは獨この話してありますが、オーベルニー

と申すすまことに寂しい〜山の中に、一軒のお寺が立って居ました。が、毎年〜冬になると、坊様たちは、狼のために、甚く困らされる、と申すものは、冬には、森の中に、狼の餌食がなくなる處から、大胆にも此お寺の屋敷内へ、這入り込んで裏庭の邊をワロツイテ居って、誰でも知らないで、出て来る者を取って食はうとする、或は、犬だとか馬だとかを殺して食ふ。だから、冬になるといふと、此お寺は丸で、敵の重圍に陥つたも同然で、皆坊さん等は内に引っこ込んで居るばかり、一寸も外に出ることも出来なければ、命懸けで外からお参りに来る人もないといふ、まことに寂しい、困つた、恐ろしい有様。

處で、或年の冬、そろ〜此狼騒が始まる〜といふ時、此お寺の僧正さんが、近隣の狩人ども

にと〜かして、此血腥い怪物を退治して呉れまいかといつて切に願つた、狩人ども、他ならぬ、僧正さまの頼といふので、皆心よく引き受けた。そこで二三日経つて、屈強の狩人ども十二人許り、甲斐〜しく身支度して、お寺へ集まつて来て、愈狼狩りを催うさうといふ相談をした。處が生憎此日は、大雪と來たので、とてもこんな鹽梅では狼もやつてはこまいといふので、残念ながら思ひ止ることにした。然るに丁度此日、馬が一匹お寺の中で死んだ。すると狩人の中で一番年の老つた場敷を履んだ一人が、偶然思ひついて、これで一番計略をやつて見ようということになりました。其計略は即ち次の様なのです。

先づ其馬の死屍を、屋敷の真中へ放り出して置いて、そして門の扉へは丈夫な繩で仕掛けをして

一寸と衝くと、すぐガタンピシャンと閉る様に
て置いて、さて暗くなつてから、狩人どもには各
自 鐵砲に丸を込めさせて、イザと云はゞ一度に
切つて放つ様に用意して、方々の窓に忍ばせ週邊
の燈火は一切消して眞闇となしそこで以て、大門
をサツと打ら開いて待つて居る。夜はだん／＼と
更け渡つて、週邊は森として聲もなく、雪は見る
／＼降り積つて一面の銀世界。こゝ暫らくは、殆
んど天地も死んだ許の静けさ。

すると忽ち物凄ひ狼の遠吠が耳に入った。かと
思ふと、其聲がだん／＼近くに聞えて來た。果然!!!
眞白な天地に眞黒な狼の一群、お寺の門を見がけ
て墓地に突進し來つた。突進し來つてすぐに死馬
の香を嗅ぎ附けたらしく、切りに鼻をならして此
を馳走を欲しがって居る。併るに不思議にも、門

の中へは二匹も這入つて來るものがない。こゝが
狼の賢い所で、門内には確に、只ならぬ危険が
あると考へたので、先づ其邊の事情を探らうと考
へたのである。そこで、彼等のうなり聲も黙つた
みんな沈黙を守つて、稍暫らく門を眺めて居つた
が、やがて、そーつと寺の周圍残らず飛び廻はつ
て見て、一々其邊の小藪など角から角まで探索し
て、夫から仰向いて垣の上などを見て居る。

彼は是する中に、四十五分間も過ぎた。すると、
一匹の大きな古狼が、門の前に顯はれたが、ジーン
と氣を附けて周圍を見廻はしながら、そろ／＼と
門内へ進み入り、彼方彼方に跳び廻はつて見ては、
又立ち留つて窺つて居る。處が、門内は何時まで
も、森として何一つ不思議も起らねば、危険もあ
りそらもない。

そこで、再び寺院内を嗅ぎ廻はして見て、又更に馬の死骸を嗅いで見た、が、少しも食べない、もーこれで十分安全だと見た所から、急いで、外へ出て仲間を呼びに走った。

一瞬間にして、彼は再び門内へ跳び込んだが、續いて、二十二匹の狼の群が飛び込んで来た。皆が静かに死馬の方へ急いで行ったが、やがて、喝え切つて居た食事を、ムシャ〜と始めた。

すると忽ち、入口の方に當つて、ビシャンガタンと恐そしい響がした、鐵門の戸が落ちたのである。屹驚して、狼どもは一度にパッと散った、そして一時に門へ衝き進んだが、門は既に閉ぢられて居たから、狼狼ふためいて四方八方へ走り廻はって居る。そこへ以て四方の窓から、トーン〜と鐵砲が打ち始まつた、是に至つて狼どもは、始め

て自分等が捕はれ物になって、今や正に死地に陥つたことを悟つたのである。

そこで、狼共は皆屋敷の真中へ歸つて来て、彼の最初皆を案内した所の古狼を取り巻いて、大勢で何か宣告でもする様にうなつて居たが、一つの合圖で以て四方から一度に突進して、遂に彼の古狼を、散々に食ひ殺して仕舞つた。

それからは、皆が別に騒ぐ様子もなく、自若として運命に甘んじ伏して悉く射殺されて仕舞つたといふことです。

笑ひの種

▲田舎者が東京へ出て来て、晝飯を食べよと思つて、あるおすし屋へ這入つて おすしを注文しました。『おかみさん このおすしは幾許です』

『ハイ御一人前が十二錢です』では、れすしの側にある生姜は『ホッホ、ホ、ホ、それは附きものですからただです』ジャー私は、生姜だけ頂きますすべー』

▲昔々ある處に、大旱があつて何日経つても雨が降らない、草木五穀一切枯れて仕舞つて、今にも大饑饉が始まりさうであつたので、其處の王様が大變に御心配せられて、家來共に、誰か雨を降らす人があるまいかと尋ねられました。すると一人の家來が、『雨を降らすに妙を得てる者は、龍の外にありません』と申し上げる、『ならば直様其者を召せ』とありて、早速龍を召し出して、雨を降らす事をれ命じになった。神變不思議の術を心得た龍は、何か呪をしました所が、不思議や今迄の晴天、見る／＼かき曇りて、忽ち沛然として

大雨となつて、打つて變つての寒さに 五体も戰慄へる許り、そこで、王様は『あーもー宜い、これで澤山だ、どーも大變な大雨になつたもんで寒くつて堪らない、どーか前術で、今一度温くなる様にして呉れないか』龍「温かくする事は、私の手では参りませぬ、それは私の伴に御命し下さいまし』玉フーン お前の伴といふのは？」

龍はい コタツでございませす』

考へもの

前號の石の中に隠れてるといつたのは「火」です、兄弟と云ふのは、風の事です。

愛讀諸姉の一人から、次の考へものが出ましたやつてご覧なさい。

かんが
考へもの

三河 近藤とき子

妻の末弟が或日、叔母様の處へ要用があつて行き
ました、とうとう日がかくれしました。妻の弟は男
ながら、夜道が甚だ恐いから、(虫の名二つ出づ)
あてゝごらん。

謎々

- 一、人力車夫とかけて、
- 一、めくらの障子張とかけて、
- 一、めくらの芝居見物とかけて、



家庭



ないしよといふこと

ふみ子

人の親として其子のよかれかしと望まぬものが
何處にございませうか、處が實際はなかく、そら
ばかりはまゐりませんで、自分の修養のたらぬた
め、また、不注意などのために、全く、知らず
天真爛漫な子供を、わるい方に導いて居るこ
とがわかります。

私はこういふ一人の女の兒を知つて居ります。

その女兒はまことに、かくしたてをいたします。

人の見ぬところを撰んで遊ぼうといたします。やさやます。つげ口をします、何となく卑劣な様

でしかる何ともいふにいはいれぬ不

高尚な處がございまして、どうし

ても無邪氣な子供の所爲とは思は

れません。

一体、子供が表裏の行をいた

しますのは愛情の少くない或はな

い嚴格な取扱を受けるのに原因

するのが普通でございます。子供

をしつけますのに、時々、随分嚴

格にいたしまして、其兒に對し

て十分の愛情を持つて居り、また、其愛情でしつ

けをいたしましたならば、子供は決して怨むこと

もありません。また、心はなれることもありません。それは、つまり、こちらの心と子供の心と

か融和して居るからであります。けれども愛情の

方が欠けますと、子供は

無暗に、こはがつて、目

の前では左程でもありませんが、一度、其目をは

なれますと、すぐに、か

げでわるい事をいたしました

す。かの他家にいつて却

て、わるい事をいたしました

したりまた、自家でもこ

はい人の留守の間に、わ

るいことをいたしますのは、多くこの類でござい

ます。



しかし、前に申しました女の兒は別に誰からも今申した様な取扱を受けて居りません。つまり其原因は取扱方から來たものではございませぬ。全く、知らず／＼家庭の空氣に化せられたのでございませぬ。

其家庭の人々は皆其の兒を愛して居ります。ですから一目見ますと、大へん幸福な様でございませぬが家の人々がすべて、此の兒に對して一致して居らぬといふことは、この兒に取つて大なる不幸でございませぬ。即ち母は父の禁して置きました玩具をひそかに買つて與へまして「これはないしよですよ」といつて聞かせませぬ。また祖母は子供を愛するあまりに其子のあやまちを掩ひかくしてやります。従て兒はないしよといふらを見たり聞いたり、また私語を聞いたりする場合は澤山あり

ます。其度毎に子供はこれによつて、何を學ぶでございませうか。まことに氣の毒なのは軟弱な且つ白紙の様な兒でありまして、知らぬまに、いろ／＼わるい方に導びかれます。

この兒の家の人は決してこの兒をかげひなたのある兒にしようとして、望んでは居りますまい。そうでございませぬのに、この兒がかげひなたをする様になつたのは、どういふわけでございませうか。全く家人から悪い影響をうけたのでございませぬ。ほんとは、ないしよといふことは大に氣をつけなければならぬことゝをもちす。

傳染病

醫學士

長瀬復三郎

第一 急性發疹症

これは急に全身に或は皮膚に局限して發疹し病氣の模様の起るもので其中著しきものは麻疹、猩紅熱、風疹、水痘、痘瘡、發疹ちぶすなどがありす

(1) 麻疹

麻疹は多く春夏秋に流行して、殊に二年以上六年以上の兒に多くありす、この病氣の原因及病原は未だ分りませんが、其傳染の道は多く器具衣服、患者に接觸することなどに由て實に猛烈に傳染し、東京其他の都府には殆どたゆることなく散在して居ります、而して一度これにかゝれば再かゝることはありませせん即ち麻疹の免疫を得らるゝのであります、又小兒期に於ては一度はこれにかゝるものであります。

病狀 病原菌が入つても九日乃至十日間は潜伏

して現はれませせん、九日乃至十日を経て、初めて小兒は遊ひを好まぬ様になり、元氣がなく又食事が進まず、鼻かたなる、氣管支かたる等が起て体温か急に三十八九度に昇ります、この有様が三四日もついで發疹期になり、先づ最初に顔、帽針の頭程のものから櫻實核大位の平坦なる鮮紅色の發疹がありまして、二十四時間程の間に全身に擴がります、而して同時に眼には結膜炎を起します、この發した疹を見ますと點々の間には皮膚の部分か明にわかつて居ります、かくて体温が四十度位に上り三日め位になつて段々体温は下り疹もなくなり、糠の様になりて皮がとれます（これを落屑といひます）故に發病後二週間程でよくなりす。

この病氣にはかたる性肺炎、氣管支かたる、喉

頭かたる等を併發しますこれは其麻疹の流行する時期又は其兒の身体によります。

注意 麻疹の症狀は前に申した様でありますから顔から全身にわたつて發疹するとか、又發熱咳なとがありましたならば早速他の兒と隔離し、又消毒して其傳染を防がなければなりません、又其兒は温くして外氣に觸れぬ様にし若し又非常の高熱で痙攣する様なとがありましたならば、水又は氷で頭を冷すことが必要であります、元來麻疹は傳染は猛烈でありますが症其ものは恐るべきものではありませぬ、しかし恐るべき合併症の出ぬ様に注意しなければなりません、又大人でも傳染することがあつて若し傳染すれば小兒よりも症狀重く危険なる有様を呈するものであります、常に小兒を取扱ふ人は注意しなければなりません

(?) 猩紅熱

猩紅熱は麻疹とよく似て居りますが、稍々異なる所が、重に秋と冬に多く三年乃至八年の兒がかゝります、而して皮膚に疵のある兒はかゝり易素因を持って居ります、この病毒は頑固に嚴寒に打ち勝て大都會には常に月に一二名の患者がおります、而して麻疹よりも激烈なる病毒で衣服、食物器具、患者に直接することなどが媒介となつて傳染します、但し麻疹と同じく一度なれば二度とかゝることはありませぬ、

症狀 兒は初めに不活潑になり食氣進まず咽痛、頭痛嘔吐等を起しこの有様か三日程つゝ三十九度乃至四十度以上の高熱に昇り頸、胸より初まつて全身に紅き發疹物が合併して麻疹と違つて皮膚の部分を殘さず全身が眞紅となり麻疹と異つて發

疹するも熱は下らずして、四五日で其熱が下り病勢も從て減退します而して其落屑麻疹の如く糠の様に取れるのもあるが皮膚が大きな皮ごととれます、特に手の掌足蹠に於て著しく大きくとれる此の病は二週間乃至二十日程かゝります而して腎臓炎、喉頭かたる、咽頭かたる等の合併症を起すことがあります、

注意 麻疹に對するのと大抵同一にて宜し。

幼兒の改良服

星 常子

幼兒の衣服を汚しますのは、裾の方で、上方は別にぬれもいたしませんのに、今までの様なきものではその度毎にすつかり着かへねはなりません寒い時などは、その爲に風を引く事があつて、

中々固るものです、これを防ぐために、私の友達か考へました改良服を、御紹介いたしませう

腰より上は、普通のきものでよろしいのです、丁度腰上の邊ぐらいの長さで、下は木綿巾二巾半位の太さの筒形を作り、その上の縁に、四處ほどボタンをつけ、上の方のきものへボタンをかける糸のわなをつけておくのですそれで、汚れた時には下の方だけ何度でもとりかへれば風も引かせる様な事はなく、大層便利です、下の方だけを澤山こしらへて置きますれば、上の方はホンの少しの間にあひます

附記 私の考では、上のきものも、從來の様に前を合せずつけひもをよして、被布の様にこしらへたらば一層よくなるであらうと思ひます

昔いろは料理

石井泰次郎

(か)

かばやき

かばやき大根、かばやきうなぎとも蒲の色に似たる故に名付しといひ、又蒲の形したる故に名付ともいへり

蒲焼は、醤油の付やきなり、惣して色付やきは

かばやきなり、故にかばいろやきともいふ

蒲焼は、醤油とみりん酒と等分に合せたるを、

魚をしらやきにしたる、上にかけて焼くをいふ

蒲焼は、うなぎを丸のますに、串をさしてや

くをいふ名なり

蒲焼かつを、又かつをの皮、皮へすこし身を付

唐がらし醤油、又はさんせう醤油をつけてやく

べし

蒲焼鯛

蒲焼鮭

蒲焼ひらめ

蒲焼ます

以上かつをの皮の如し

からし酢みそあへ

能き味噌を楯盆にてすりて、馬尾篩にてうら漉し

て、砂糖と酢とを入れてねるべし

みそ 五十匁

砂糖精 十匁

酢 三匁

みりん 四匁

右のわり合にて、みそを馬尾篩の裏にのせて、木杓子にて、一度は平らに、一度はたて、漉した

或母の日記 (第六回)

明治三十三年九月三十日生れの女子生徒

無名氏

るみそに、砂糖を合せて、鍋に入れて火にかけて、
ねりて、のちに酢を合せてつくるべし
からし、かきたるを一匙いるべし

採合表

- ひらめのつくり身、わり紫蘇
- さきひ、こ、うどのたんざく切

かすていら豆腐

豆腐をよく布に包みてしぼりて、桶盆に入れてすり
て、玉子を黄味ともに入れて、すりあはせて、砂糖
を入れて、とろくにして、敷布をして蒸籠に入れて
蒸すべし、玉子やきなべに油をしきで、夫に入れて
やき目をつけて出すべし

十月上旬梯子だんを(高サ七寸程)一つのぼる
食べ物を見るとウマ〜と云ふて手を打つこと又
他のものが万歳となふれば手をあげる事をねば
ゆ

やうやく自ら立ち上がり得るに至る

下旬に至り梯子だん四五だんをのぼるやうになる
自分の手にもちたるものを人にわたす

二十四日種痘をなす

今月より毎食に小茶碗に一抔つゝ食事をなす、

其他さつまいもは大によろこびて食ふ

中旬よりバー(宿の老婆)と呼ぶ事をねばは下旬

になりチャツ〜ン(オトツサンノナマリ)と云ふ

事もかぼゆ

種痘後八日目より痘あらはる左四右一ために夜發熱し食を減じさげんよろしからず

十一月四日(種痘十二日目)に抱瘡流しとして赤飯をサンバイシにのせ五色の旗を立て熊野神社に奉納す

茲に私の實行に苦しみし事は斷乳と云ふことなり育兒法の理論として述ぶる所によれば乳ばなれば齒の生ひ始めを以て適當の時期と申しますがさて實際にありては今迄毎日のましてきたりしものを俄に或は次第にやめしむる事は母自身の子守なごせし場合には非常の困難と思はる經驗ある既母諸君の御指教を乞ひます

九月より妊娠の兆あり乳の量著しく減じ十一月頃は全く出ぬやうになりたれば小女の食慾増進したりために胃の擴大なりしを知らずして居りしに十二月上旬母の實家に(八里の距離)つれ往かん

と寒さををかして車に乗り参りしに其夜より發熱

して苦しみしかば醫師の診斷により先きの病徴よりして身躰一般に衰弱し居る由を知りこれより極力快復をはかりしも更に其効なく全く病兒となれり

病狀記事

十二月五日夜より發熱して苦む翌日醫師の診察を受く風邪に加へて胃弱なりとこれより粥、卵、牛乳さしみ等を食品とし服藥せしむ牛肝はいやがりて飲まず魚類もあらのさしみ位より外のものは食はず一週間療治して宅にかへる宅は魚類の供給不便のみならず醫師に遠くために療養を怠る十日間なりしかば病況日に増し重くなるばかりなれば廿四日又醫師の許につれゆき夫れより日夜看護に力をつくすと雖も更に其甲斐なく一月中旬に及び衰弱の極度に達し醫師も匙を投せんばかりとなり

今は人乳により快復をはかるより外に途なきに至りしも性來内氣の質にて他人の乳をのまざる方にてまさに死せんとするに臨みてすら絶てて他人の乳を口に入るゝなく急須にしぼりためて無理に飲ましめんと計りしも夫れすらさげんよくのまづ、おもゆるみるくの類も時にのみのみまぬことありよわりはてたる末はねむる事もごくわづかなれば疲勞日毎に加はるばかりにて肉おち骨ゆるみすはることもできねば抱くことも背負ふことも容易ならず實に小兒の病めるを看護するほどせつなきものはあらじかくして一月十七日(發病より四十余日)に至り蛔虫二疋くだりてより様子やゝよろしく其後一週間もへたればいちじるしく元氣づきこれより服薬もやめ専ら食物に意を用ひたれば日を経るに従ひ血色をあらはし旬みずり立ち上り物を弄ぶ

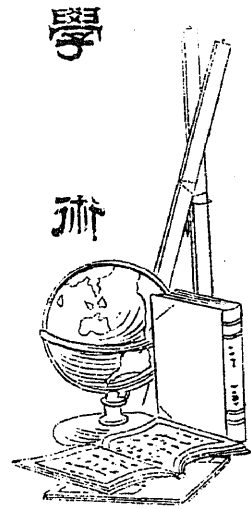
やらになり發病後凡そ三ヶ月をへて全く先きの(十二月上旬)身心に快復せり

Men are unwise than children; they do not know the hand that feeds them.

Carlyle.

大人は小兒よりも愚なり、彼等は自己を養育する所の手を知らざるなり

カーライル



夢のはなし

東 基 告

若し詩的、文學的に夢といふものを解釋したも
 のなら、夢はいかにも、趣味の深い題目である。
 夢の當にならない所、如何にも轉變の計りかた
 い所からして、厭世的の人々は、人世の浮沈管な
 らぬに持つて来て、世は夢の如しだと例れた。古
 は莊周といふ人、夢に胡蝶となつて、覺めてから
 自分が胡蝶か、胡蝶が莊周かも疑つたなどは、頗る

興味のある話してはあゝまいか。

山海萬里を隔て、日夜戀し懐しとばかり、と
 ても顔も會はず事など出来まいと諦めた親しい友
 垣とも、夢には眞實相見て物語ることも出来る。
 だから、古の戀愛詩人なども「夢てふものを頼み
 初め」たり、衣の裏を反して 寝たとも、歌つた
 のである。

わはれ、杖とも柱とも頼んだ夫に前さ立たれて
 からは、ある甲斐もなく、生活へ居る貧しい、
 寡婦も、夢には夫と共にありし昔に歸ることも出
 来る、よし覺めての後の涙となり果つるにしても。
 わらゆる罪を侵して、不義の榮華に誇つて居る
 者も、夢には、此世からの地獄に陥るを免るゝこ
 とは到底出来ない。

若し、毎晩夢見ることが、出来れば、つまり其

人は、他の人よりも、一倍長く自分の生涯を暮す様なものである、何故かといふと、夢を見ない人は、眠って居る間は言はゞ死んで居るのも同様であるのに、自分だけは、其間絶えず活動して居るからである。

こんな具合に夢を考へて見たり、又昔からよく言ふ通り、夢のお告げだとか、靈夢に感じたとか逆夢だとか、正夢だとかといふ様なに夢を見ると夢といふものは、如何にも面白い、楽しい、有りがたいものであるが、若し科學的に解釋したならば夢とは果してどんなものであらうか。

そこで、夢を眞實解釋しやうと思ふが、夢は、吾々の眠っている中に起るのであるから、先づ眠りといふ事を考へねばならぬ。

睡眠 眞實に吾々が睡つた時は、丸で死んだと同

然吾々の心は一切働かない、生理的即身体の方からいふと、血液の循環とか、内臓の活動とかは著るしく緩慢になる。心理學的の方面から見ると、心は一切無意識の状態即一切考へなしである。従つて一寸した外部の物事には中に氣が附かない

此様な睡眠は、吾々の身体精神を休息させるには頗る必要なのである、徹夜をしたり、睡つても寝られなかつたりした朝、身体の具合がわるいのは、誰でも知る處であらう。處が、吾々は夜床に付いても、すぐ眠つて仕舞はない、殊に甚く心配したり勉強でもしたりして、直ぐ床に入ると、容易に眠れない、で、通例睡眠は次の順序を取るものである即眠氣から起つて、眠付、熟睡、半睡、醒覺といふ具合である。

夢を見る時。熟睡の時といふのは、全く夢も何も

見ない、其最も多く見るのは、通例半睡の時、即精神がボーッととして、今暫らくすると睡た目を摩つて醒覺めやうといふ時である、最も睡付きの時でも見る、又熟眠の時でも或學者などはそれは、全く夢を見ないのでなくって、見ても忘せて仕舞ふのだといつて居るが、先づ通例は見ないものとして居る。だから、夜中夢を見るのは、取りも直さず熟睡しないといふことで、前に述べた様に樂天的に考へれば兎に角だが、衛生上にも不可けなければ、精神上にも頗る不可けない、何故かといふに身体は横になつて居ても、精神は一向休まないで働いて居るのであるから。つまり寢て居ても、起きて居るのである。

夢の原因 そんなら何故夢を見るかといふと、夢を誘ひ出す原因の最も普通なのは、内臓の具合、

即呼吸器とか胃とか、心臓とか、腸とかの具合が平常と異なつて居るといふと、夫からして起る。食べ過ぎてお腹が苦しくつて寢ると大抵夢に襲はれない事が無い、夫から脳髓の疲勞である、余り心配して眠ると夢を見る。夫から睡眠中に音がしたり、身体に何か觸たりするとこれも、夢を起す原因になるのである。

(未完)

露の色及虹

京都 圖 南 子

露が呈する色及虹の事につきて御話をするには先づ光の反射、光の屈折、光の分散と云ふことにつきて一應説明をしなければなりません。

一圖に示すか如くまりをイロの如き垂直の向きに壁又は板に投げつけますれば、まりはイロの向き

に反り來りますが、これをハ口の向きに投げつけ

ますれば、ロニの向きに

反り來ります、光も亦物に

突き當りますれば、まり

の跳ね反ると同じ様に跳

ね反ります此の如き現象

を光の反射と申します。

次に二圖の如き茶碗の

中にと一つの銅貨を入れ、

その銅貨が丁度、茶碗の

縁にかくれて見えざる程

の位置に茶碗を棒げなが

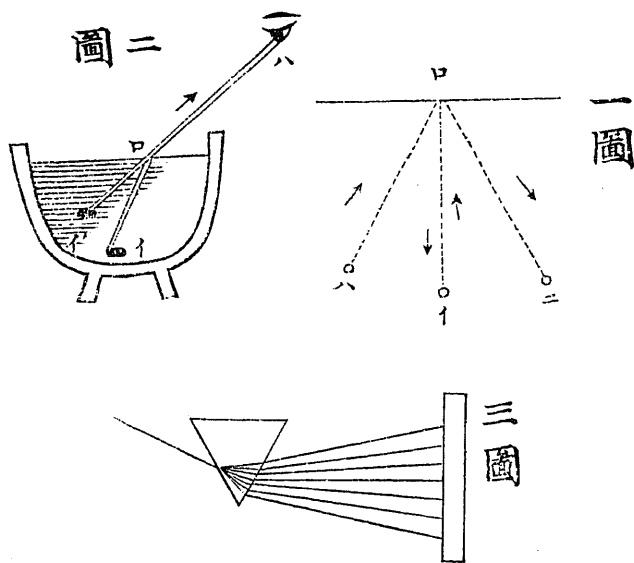
ら、これに水を注ぐとき

は銅貨は始めの位置より

浮き上りたる如く見え、

その全部を見ることか

此の如き現象を光の屈折とは申すのであります。



出來ます、始め茶碗に水を注かざるときには銅貨

(イ)より來る光は一直線に

進みましたが、これに水

を注ぎました後は、光は

水の表面にて急に方向を

變へまするにより、その

眼に入る光は恰かも、イ

ロハの途を取りて進み、

銅貨は(イ)の位置にある様

に見えるのであります、

凡て光は一つの物体より

密度の異なる物体中に

斜に入るときは、必ずそ

の進行の方向を變します

孃等は硝子にて作りたるもの、三角柱状をなせるもの、即ちプリズムと云ふものを御承知でありませう、このプリズムに日光を當てプリズムを透りたる光を襖に受けまするときは、美麗なる七色を呈します、即ち三圖の如くにすれば最上に桔梗色、次に藍色、次に青色、次に綠色、次に黄色次に橙色、次に赤色と云ふ順序に現はれます、此の如く光が分れて種々の色となることを光の分散と申します。

然らば反射、屈折、分散と云ふことも解りましたから、愈々本論に進みませう。

草木の葉にかゝれる露か、日光に照さるゝ中に、見様によりて種々の色を現はしますのは、全くプリズムによりて光が分散せられて七色を現はすと同じ作用によりて起るのであります。

四圖の如く日光イが、露滴の表面に投射する場合には、一部はその表面より反射をしますし、一部は屈折して内部に入り込みまして滴の背面に達しますと、再びその一部は屈折して外に出て、余りのものは反射して前面に参りまして、この所に又一部は反射し余りのものは屈折して外部に出ます而してその屈折する毎に光は多少分散して種々の色を表はすに至るのであります。

夫故に光の投射する向きによりては内部に於て、數回反射を累ねることもあります、勿論この反射は何回累ねませうとも、その度数には關係なき理由でありますけれども、反射の度毎に一部は外部に出てこれを失ひまするにより、光の量が益々減して遂に眼に感ぜぬ様になるのであります。

虹は空氣中に存在する無數の水滴が、太陽に照

らざるゝときに生ずるものでありまして、普通は大陽と反對の向きに生ずるものであります、今五

圖の如く大陽の光イが一つの水滴口に當り、その内面に於て一回の反射をなして

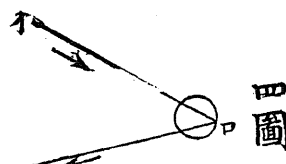
分散し、その光例へは赤き色か眼に入るものとなります

れば、その投射線イに平行して眼を通過する直線モセ

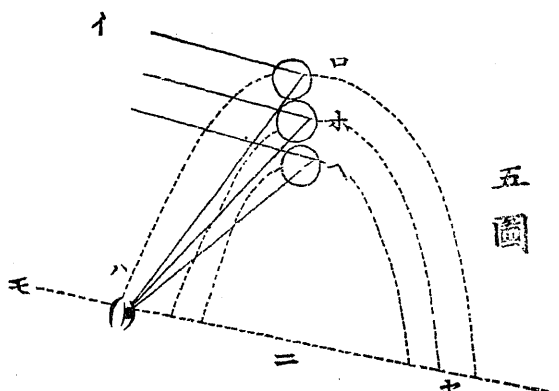
を引きますと、このモセなる直線上の一點、ニを中心としまして、ロニを半径

として圓を畫きますと、

此圓周上の水滴は眼に對して境遇が同じくありますから、悉くロの如く赤色の光を眼に送るので



四圖



五圖

あります、虹が必ず圓形になりて生ずると云ふのは此の理によるのであります、尤もこの圖の場合

に於きましては水滴より分散する光の順序は、赤は最下にありて桔梗色は最上に

あります、故に水滴より眼に送る光が赤色であります

るならば、下部の水滴より眼に送り來る光は橙、黄、

綠、青、藍、桔梗と云ふ様に光をばプリズムを通らし

めたるときに生ずる色の順序と同じでなければなりません

せぬ。故に虹は七色の弧狀をなしまして、外側は赤色を

なし内側は青、藍、桔梗寸の色を現はすのであります、然しながら水滴の内面に於て二回の反射をなして、而して後に屈折して外に出つるときにはこれと反対の色を現はす所の虹が出来るのであります。

鐵道の話

菊 亭

鐵道といふものは子供が汽車々々といつて大へんに面白がるものでありますからフト思ひつきましたて貴重なる本誌を拜借してかいつまんで鐵道の話をおいたさうと思ひます、私は然り而してといふ風に六ヶ敷ことをいふのは却てらかな方であります、がさア平たく子供にもよくわかるやうに書けといはれては少々恐れ入るほうであります、出来のよ

しあしは後の評判にまかせまして少しばかりお話をいたします。

一、鐵道の起源

鐵道とはどんなものだ、と此頃も子供にきかれました、随分こまりました、よく考へて見れば至極尤な質問であります、今世間で鐵道と申しますと文字の通りに鐵にて造りたる軌條を敷いた道路だけを申すではなくて鐵の軌條を敷きたる線路の上を旅客をのせる客車や荷物と運ぶ貨車や郵便物を積む郵便車又手荷物を運送する手荷物車その外いろいろの車をつなぎ合はせて其真前に機關車といひて蒸汽の力で動く車をつけたもの即ち列車で多くの旅客や貨物を運ぶ一つの仕事をさして申すのであります、唯僅かに鐵道といふ二字でこれだけ長い意味をもたせるとは随分無理なことでありましたが實

際さうでありますから何とも致方がありません

ぬ

扱そこで第一にチヨット鐵道の起源を申しませう
さうとするとどうしても線路と此上を通行する車
とのことを申上げなければなりません、これは存
外おもしろいことであります、先づ線路のことか
ら申します、ズット古いことはとても分りません
が線路の起源は英吉利で石炭山より石炭を運ぶ時
に初まりました、最初石炭のまだ澤山に出ぬ時分
には人の肩なり背なりにて運び少し進みでは馬車
にて運んで居りましたが、かゝる手緩ひことでは
澤山掘出して山をなして居る石炭も容易に市中に
持出して金に代へることも出来ずいはゆる寶の持
くざりといふ有様で非常に困難を極めました、そ
こで石炭掘の仲間ではどうか名案もがなと工夫し

て居ります折柄千六百三十年頃即ち今より凡そ二
百七十二年前にビユーモントといふ人がニュー
カッスル、アツボン、タインといふ處で木を敷きた
る道路をつくりまして此上を石炭車を通行させる
ことにいたしました、これがそも今日線路
の起源であります、チヨットさくとなんだつまら
ないといふやうなことでありますがよく味つて見
ますと餘程感服すべきことであります、此發明と
いふものは今日の如く鐵の軌條を敷くやうにした
ことよりも尙數十等も數百等も優つた發明だらう
とかもひます、斯る有様でありますから此時代は
まだ鐵道でなくて木道でありました、此木道は至
極結構なる發明ではありましたが車輪のために摩
滅することが早いから困難なる事情もありました
が先づすりへつた木道の上に更に木片を打つけて

一時姑息の修繕をして居りましたけれども充分でないところからして此次には木道の上に鐵板を張りて纒かに摩擦を防いで居りましたがかくしてもまだ充分でないからして千七百六十七年にはレイノルツといふ人が鑄鐵製の軌條を初めて製造して今までの鐵張道にかへました、然れども其頃の車は一つの車で一ぺんに澤山の石炭を運ぼうとふもひて大きな車を用ひて居りましたから其目方も大へんに重ひものでありました、故に車の通過するときに軌條が屈折れまして其修繕に困難を極めました、よつて千八百十六年には發明人の名は明らかに分りませぬがベツドリン頓鐵工所におきまして練鐵の軌條を製造し次いで千八百二十年には同工場のパーキンシヨウといふ人更に練鐵軌條に改良を加へて政府より特許を得ました、こゝ

に至りて鐵道線路の狀態は今日見るところのものとさしてちがはぬやうになりました、此後におきましても線路の起源及沿革に就ていろ／＼申上げることがありますが別にふもしろいこともありませんからこの邊にてやめまして次に車のことを申上げます、

Wisdom is better than we apions of war.

智識は戦争の武器よりもよし。



史傳

津崎矩子

(つゝま)

下村三四吉

前回は述べたるが如く、當時外交上の難件の處理は、實に燒眉の急務なりき。これと相關聯せる將軍養君治定の問題は、次第に活氣を加へ來りぬ。これ亦當時にありて、最も事情の紛錯せるものなれば、ここには、その要領を擧ぐるに止めんとす。第十三代將軍家定の養君に關する問題は、既にその端を米艦初度の渡來の年、將軍家慶麁じて家定職をつぎし時に發せり。家定は、生れながらにして多病、到底世子を得べき望なかりしかば、越

前侯松平慶永の如きは、早くも、家定嗣立の始めに當りて、大に之を憂慮し、島津齊彬と相約して一橋慶喜をして將軍の養君たらしめんことを企圖したり。喜慶は、水戸侯徳川齊昭の實子(第七子)にして、三橋の一たる一橋家を嗣ぎ、年既に長け英明の聞えあり、人望多くはこれに歸せり。
一橋慶喜を將軍の養君と定めんことは、大老阿部正弘も賛成せしところにして、幕府に於ける少壯俊邁の士は、深くこれに同意せりき。安政三年の末、島津齊彬の養女篤姫が將軍の御臺所として入興の事終るや、齊彬は、西郷隆盛に命じて、養君治定の事に周旋せしめたり。隆盛乃ち、慶永、土佐の山内容堂及び宇和島の伊達宗城等の諸侯、及び越前、水戸、尾張等の志士と共に計畫するるところあり。さて、隆盛は、一橋を世子に立てん

には、京都に趣きて近衛三條等の公卿に説き、東西相應じて盡力するに若かずとて、京都に入りぬこの時、越前よりは、橋本左内選ばれてこの事に當り、また來りて京都に在り、その他有志の士共に奔走計畫に違なかりき。

一橋養君説は、殆ど當時天下の輿論たるが如き形勢にて、閔老を始め幕吏中の賢士は、更なり、諸侯も、親藩外様の別なく、多くはこれを望めりされば、この問題は直に決定せらるべく、別に計畫運動を要せざるべきに、その困難なりしは、これに反對せる一派の現はれしによるなり。そは、所謂紀州養君派にして、同派にては、將軍養君の候補者として、紀伊藩主慶福を挙げけり。慶福は十一代將軍家齊の孫にして、その父齊順は十二代將軍家慶の弟なれば、現將軍とは従兄弟の間柄な

り。故に、その血統よりいふときは、慶喜よりは遙かに近かりき。年齢は安政三年には、僅に十一歳なりしが、このなほ幼少なる點こそ、却て幕府の大奥及び近臣が擁立を圖りし主意なりしなれ。此等の輩は、國家を以て憂となすの念なく、ひたすらに、自己の安逸を貪り威福を張らんことをのみ心がけ、賢明なる主君を戴くことを欲せざりきこの時に當り、紀州養君派に最も盡力せりしは、紀州の家老水野忠央にして、大奥の上臈歌橋なるものに結び、家定の生母本壽院夫人（即ちおみつの方）に説きて聲援となし、また側衆たる平岡道弘、藥師寺元眞等とも結托し、百方一橋世子派を助けたり。その勢力は、表面上は甚だ微弱なるが如しといへども、幕府の大奥は、時に天下の政治をも左右するの勢力ありたれば、一橋養君派に

對して、實に隱然なる一敵國たりき。

かくて、紀州養君派は、密かに將軍に説きて、一橋殿養君とならば、君には忽ち隱居の身とせらるべしといひ、以て將軍の心を動かしぬ。而して一橋養君派の重要なる賛成者たる大老阿部正弘は安政四年六月に病歿し、その後承けたる堀田正篤は、慶喜の生父たる水戸齊昭を嫌厭し、ために、一橋養君派にも力を盡さず、紀州派の漸く勢力を得るに至れる成行に任せたり。

將軍養君の問題につき、一橋派と紀州派との相對抗せるは、安政元年頃よりの事なれば、ここに至るまで、常に外交問題處分の事と相伴へり。外交問題切迫し内外多難の際に、幼弱の將軍を立つるの不利なることは、火を見るより明かなるを以て、一橋養君派は當初最も優勢にして、紀州養

君派の勢力はさまで注意せられざりしに、奥女中輩の必死の運動は、遂に幕府内部の事情に一變を生ぜしめ、安政五年一月、堀田閣老が米國との通商條約の勅許奏請の爲めに上京せんとする頃に及びては、幕府の内議は皆紀州養君説に傾けり。さてこそ、前節に述べたる西郷 橋本等の入京斡旋の事は起りたるなれ。

堀田閣老の上京の要件は外交上の事なるが、これがために、養君問題の狀態をして愈々切迫せしむるの機會となりたり。當時隆盛は、幕府の内情を察し、事の容易ならざるを見て、入京前、江戸にて、天章院夫人（即ち篤姬）に説き、夫人より養父近衛忠熙公に書を贈り、建儲の内勅を幕府に下されんを請求せしめ、隆盛自らその書を携へて上京せり。よりにて、隆盛は屢々忠熙公に謁して

計るところありしが、この際、村岡は、深く國事を憂ひ、近衛公への執成は勿論、諸公卿の間に出入するの便宜をさへ與ふことを務め、隆盛をはじめ、諸士の盡力を助くること、少なからざりき。

(つづく)

我宿に春こそ多く來にけらし

咲ける櫻のかざりなれば



文苑
狂女



上

ろすゐ

わはれ浮世のはかなさよ
 吾子と思ひ思はれて
 よしや妾身は砕くとも
 いかなる業も厭いじと
 計らず御身はいつしかに
 妾身を他處に捨小舟
 よるべき方も白浪に
 思へは長の年月日

來ん幾年の末までも
 二人はいつも離れまじ
 御身に孝とし思はへば
 堅く契りし甲斐もなう
 とある男の子を便とし
 棹失ひし心地して
 浮び漂ふわはれさよ
 御身の膝元にもつて

云いんとするも花のがま
風ひきませせなやよ子よと
妾がかたえに纏ひつゝ
今猶聞きつる心地して
海より深き御身の恩

下

御身を恨むにあらねども
兎や角思ひめぐらせは
御身の御心いかにとも
愛の母君母君と
ゆられくゝてあの空の
昔に聞きしあの聲を
問ひ来てませややよ君よ
學の道も誰が爲に
いご今日よりは徒に

雪の夕や霜の朝
御身の着ませる御衣を
おほせ玉ひし言の葉に
山より高き御身の恩
いかでか是を忘るべき

來ん年月や越し方を
胸板さけん心地して
妾はもとのまゝにして
磯うつ浪によぶ子鳥
君ぞ戀しと眺むれば
今一度だに心あらば
是ぞ此世の希望なる
誰が樂みはたどるらむ
消なん命をまつばかり

落る涙やよふ聲や
學の庭を何處にしつ
岸のあたりをそこはかと
晝はひねもす夜もすから
千々の思にやせはて、
涙に劣る玉川の
慣れし小笹を友として
狂ひてありく少女あり

花見

東くめ子

花見ごろもを
よそほひなせる
花と色をは
都大路を
身にあらたへの
わりごさげつゝ
まことに花を
うるはしく
をとめらよ
きははんと
ねりゆくや
布子きて
ゆく子らぞ
めづるらん

霞たなびく

野にやまに

朽ちせぬ花

つねを

善の報いに

名もなくて

世にまつろはぬ

すね人に

ふもはぬ幸の

花さきて

譽れの實のる

ためしあり

よしや生れし

人のよの

譏りありとも

まごころの

よさとあしきは

幾千代に

朽ちせぬはなと

にははまし

海

竹柏會同人

伊藤梅子

わたつみの千ひろの底にかつき入りて

世のなりはひとあはびとるなり

樺山常子

かぎりなき青海原をとぶ鳥の

翅やすむる帆ばしらの上

服部しげ子

久方のあめのぬぼこのしたたりや

大海原のはじめなりけん

佐藤朝恵子

櫻島とはくかすみて真帆かた帆

かぞへもあへぬ浪のうへかな

宮本より江

智の鍵に探るとすれど極みなさ

海のみ神のみ幸をぞ思ふ

大竹伊勢子

のぞみおほき人のこゝろはうなげらの

はてなきよりもはてなかりけり

堀 孝子

はらへともうき世のちりによむれては

硯のうみのかわきがちなる

淺井 護

わたつみの神いかりますかあなかしこ

七日なゝ夜をたゝわれにある

中村ふみ子

越の海おきつしはかせ吹きあれて

そらよりふつるわら浪の聲

關屋 愛子

一人子の舟出なしつる其夜より

夜毎ゆめみるわら海のおも

山本 芳子

鷗うめあそびなみ静なる春の海

われも小舟を浮べ遊はん

有賀 晴子

白かねのま玉となりて糸となりて

はまのまさご路波よせかへる

久保 花子

わたつみの底のこゝろはしらねども

長閑にみゆる春の海かな

金井 繁子

龍神のいかりおそれし海原も

ゆきゝひまなき世となりにけり

西方 鐵子

別れにし舟はほどなく見えわかず

霞にこもる沖つしらなみ

清水 錦子

青だゝみしけるがごとき海原に

あそぶがごとく見ゆる舟かな

長谷部 和子

のぞみあるますらたけをしずめけん

うみとも見えすかすむ春かな

松井 友子

鳥がくれ又しまがくれゆく舟の

いつ着くらんか知らぬみなとに

佐々木 雪子

磯づたひ日毎あゆめば幼子も

波をおそれずなりにける哉

佐々木信綱

いとせめて波にむかひて語らばむ

人に語らむおもひならねば

外國にある友に 東 条 子

ありし世をしのぶが岡にきて見れば

きみとながめしはな咲きにけり

折にふれて 全 人

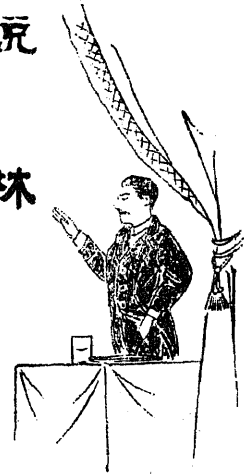
月に泣き花にうかる、みやひをの

あまりさはなる世にもあるかな



説 林

保育法の改良



吾人は屢「六ヶ敷つても説明すれば子供に分ります」との言譯によりて、如何にも三才乃至五六才の幼兒に取りて、不適當なる程六ヶ敷きことを幼稚園に於て授くるを見るなり。唱歌に於て然り談話に於て然り。手技に於て然り、而して最も幼兒の生命とすべき遊戯に於て亦然らざるなし「説明すれば分る」なる程子供とても、説明すれば分るべし。然れども、大人の説明によりて

果して吾人の期する所の眞實の了解を、幼兒が得つゝありや否やは疑問なりと知らずや、或は吾等の説明の意味と全く異なりたる觀念を得て、併も『分りました』と答へつゝあるやも知るべからず苟くも此の如けんか、間違つたる觀念をして先入主とならしむ、保育者の責やまことに大。

よし、眞實分つたにせよ 夫を分らんが爲めに可憐なる幼兒が、其軟弱なる腦髓を苦しむること幾許ぞ、乞ふ如何に苦しみて、幼兒輩が吾等にすら容易に解し兼ねる唱歌の歌詞を授けられつゝ、あるかを察せよ、而して、此の如く彼等の腦髓を苦しませしめて、而して彼等に益する所、また幾許ぞ 今や子供らしき唱歌も稍世に顯はるゝに至りたりといへども、尙「民草」の唱歌も教へられ居るなり、これ其一例のみ、吾人は多くを擧げず。大

人に取りて面白きものを教ふる、これ誤認の根本なり。

談話に於ても然り、吾人は往々にして、大人にすら實行し難き德行を幼稚園脩身話として授けつゝあるを見るなり。諸君、幼稚園に次ぎては、更に小學校あることを記憶せられよ。

小兒の發達に注意して
ごらんなさい

單念生

私は小兒の身長体重及腦が如何に發達するかを簡略に述べて見ませう

(一身長 或るイギリスの學者の調べたる所によりますと男は生れたる時は凡そ平均一尺六寸程ありまして女は之れより少しく小くあります 夫よりだ

んく生長する割合を申しますれば男は一年目に
 は全体の百分の四十を増し女は百分の三十を増す
 と云ひます夫れより二年目は男は百分の二十五女
 は百分の十一二位であります三年目は殆んど同一
 で百分の十五位であります然るに四年目になりま
 すと男は百分の十でありますが女は百分の十八九
 を増します五年六年は略同一で百分の七八位であ
 ります七年になりますと男は百分の八九位女は百
 分の六七位になります八年は略同一で百分の五位
 であります九年になると男は僅二百分の二三に減
 じ女は百分の五以上であります十年は共に百分の
 七位であります而して之より以後に於て最も身長
 の増すときは男は十六歳の時で百分の八位女は
 二十二三十四歳の時で百分の七位であります斯く
 身長の發達に高低がありますのは種々の原因があ

りませうが一の原因は身長の伸びる時は他の機關
 は發達せず又他の機關が發達する時は身長が伸び
 ないのであります

(二) 体重 是もイギリスの學者の調べたる所により
 ますと男は生れたばかりには平均八百五十目位に
 て女は之より少しく軽くあります一年目になりま
 すと男は一貫八百目程を増し女は一貫六百目程を
 増し二年目には男は一貫目女は一貫二百目程を増
 し三年目は男は三百六十目女は四百八十目程を増
 し四年目には女は僅に二百四十目男は三百六十目
 を増し五年目には女が三百六十目男は四百八十目
 を増し六年目は男女共に殆んど前年と同一であり
 ます八年目は男女共に同一でありますして六百目を
 増し九年目は男は六百目以上に及ぶに反して女は
 五百目に減じます夫れより十年目は男女共に大に

増して男は八百目女は七百目に及びます而して之より以後に於ては女は十一二十三三十四十五歳まで非常なる割合を以て増加し其十三四歳の頃は一貫三百目以上を増加し夫れより尙増加を續けつゝあるも七十八歳に至れば三四百目を増加するに過ぎざるに至ります之に反して男は十一歳より次第に増加し十六歳に至り其極點に達し二貫目の増加を爲すに至る夫れより多少増加の割合を減ずるも十八歳の終り頃に至れば大に減じて六百目の増加を爲すに至る此体重の増加を爲す時も前の身長の場合と同じく他の機關の發達は遅緩となり増加の割合遅緩となるときは他の機關が發達しつゝあるのであります

(三) 腦の重量 腦の重量は年令に由て差異あるものであります或時は重く或時は輕きものであります

す獨逸の或る學者が調べたものかありますから左に申上げませう男女共に生時は百多目餘でありますが一一年目には大に増加して男は二百五十目以上女は二百三十目に達し二年目には男は二百八十九目女は二百五六十目に達し三年目には男は殆んど三百目女は二百八十九目となります四年目に至り男は大に増加して三百五十目に及び女は二百九十目に至ります五年目には男は又減じて三百三十目となり女は尙増加して三百二十目となります六年目には男女共に増加して女は三百三十四目となり男は三百六十目となる七年目には男は前年より僅に減じ女は大に増加して三百五十目となります八年目には男は増加して三百七十目女は減じて三百目足らずとなります九年目には男女共に増加して男は三百八十目女は三百三十目となり十年目には男は

稍減じ三百七十目となり女は三百四十目となります而して之れより以後は男は十二歳の時大に増加して四百目以上に達し十四歳の時は又減して三百七十目許となり十五歳の時更に四百以上に達し之れより二十歳に至るまでは僅に減ずるのみであります女は十二歳より次第に増して十四歳の時は三百七十目に及び之より十七歳までは稍減じ十八歳の時は三百六十目位となり其後には少しく減ずるも大なる變化はありませぬ

以上の三状態を合せて考へ見ますれば男子は五歳頃には体重増加の割合強くして身長増加力は大に減じ脳の重量も亦減じます九年目には身長増加が大に減じて体重の増加は稍増し脳の重量は大に増します十一才には体重大に増すも身長増加は減じます而して脳の重量も多少減じます十六

才の時は体重身長脳の重量共に大に發達致します女にありては四才の時には身長大に増加して体重増加の割合大に減じ脳の重量は増加しつゝあります八才より九才の間は体重大に増し身長は割合に増さず脳の重量は稍減ず十一歳には身長増して体重は増さず脳の重量は減ずる方なり十三十四歳は身長体重脳の重量共に大に増加します以上の事より吾人は氣をつけて脳の重量の減少時期などに無理に勉強などをさせてはならぬことがわかります又最も發達する時期には食物も運動も修學も共に完全ならしめ一生の基礎を作ることに大に注意しなければなりません



寄書

色に對する子供の嗜好

長野 飯島八千溪

之は、昨年十一月廿二日に、尋常二學年の乙組（學力によ）の女生徒に、色の事を教ふる序に、此等の生徒で、好む色を試みましたに、左の結果を得ました。

尤も、用ひました色紙は、松本文學士が、御工夫のものであります。そして、試みました生徒數は總て、五十七人でありました。

結果表 百分比

索 二二 三八、六〇

綠 八

晴青 七

赤 六

黃 六

橙黃 五

淡赤 三

青 〇

五十

一四、四〇

一二、二八

一〇、五三

一〇、五三

八、七七

五、二六

〇

以上の結果が、果して、誤り少きものとすれば、日頃兒童の手にする玩具や、又は教授器具などの着色には、大に、注意せざれば、意外の不結果を來すことがあるでまいましょ。併し、之は、只一回の試験でありますから、餘り効力がまいますまいが、毎年之を試みて、年齢と共に、如何に其嗜好が變移するかを考察して以て、之を、統計的に研究し教授上の參考にしたならば、大に得る所がまいますよ。



子供の躰方につきて

相摸 通信員 平 岩 繁 治

私は子供の躰方につきて少しく感じた事がありませんから御話し致しませう。

私の親戚に一人のわんぱく子供がありました、年はまだ六才二ヶ月許りでありますが、年に似合ぬ事をするので、両親は非常に心配し此の子供のために前後策を案じた事が度々であります、此のわんぱく子供は如何なる悪しき事をするかと申しますと、一は友達のをもちや等を始めとして、他人の者をいきなり手をかけて、いやだ〜といふのもさかず、取りにかゝるので、若し渡さない時は手當り次第着物の上でも、どこでもかまわず喰ひつきてなかせ、其の暇に取りて逃げ歸りて座敷の隅に積み重ねて悦ぶ習慣があるのです。今一つ

は火を持ち遊びあちらのいなぶら（藁を積みたる所）こちらのつくて（肥料を作るため藁草等つみたる所）に火をつけて「あーかじだ〜」と叫び土をつかみかけては此の上もない愉快としてるのであります、それ故両親もあちらからもこちらからも、おしりを貰つていひ譯にこまるのであります、止むを得ず家の中にしぼりをいて番人をつけた等もあり、又日に二三回位は一所につれ行きて遊ばせ等して、色色手に手をつくせども中々此の子供はさゝ入れず、少しもよき方に向きません。そこで両親も、是非なく火吹竹又は火箸にて打ちなぐり、これからあーゆうことをすると打ち殺すぞと色々戒しめましたが子供は只黙して頭を下げる許で物をいひません。夫から又物言はずして座敷にすわつて、其のまゝねむつてしまひして

とも度々ださうです。

或日其の子のお父つさんが私の許に來まして申し
ますにはどうしたらばわの子の性質がなをるだら
ーと。私もあいさつにこまりて即答は出來ません
でした。暫く立ちまして一計を案じました。私の
思ひますにわ彼の子供は生れながらにして其の性
質を持ちしに非ずと思ひます、必ず其の原因があ
るに相違ないから、その原因をしらべるのが必要
でせうが、今私が極端な計を考へましたから其れ
をやつて見るがよからう。即彼の有するき物をも
ちや等一つ所へ積み重ねて、子供居る所にて火
をつけて一家内の者集りて「利三(小供の名)火
事た〜」と言つたらどうでしやうと申しました
所がお父つさんは直ちに家にかへり子供の居ない
間に、子供の物残らず積み重ねて前に用意して彼

れのかへり來るや否や直ちに火をつけて「利三火
事だ〜」と一家の者寄り集りて叫びました所が
彼れ如何にかしけん。急に母の傍に座し手をつき
て泣きながら「を母さんを父さんかにん〜」と
こゑをあげて改心したる風情です。から「それでは
をまへこれからお父さんやお母さんのいふことを
さくことが出来るか」と問ひましたに彼れは頭を
地につけて返事しました。火に水をかけて消し止
め、后父は靜に利三に向ひ「火事は大變をもしろ
いものだろ〜」とといしに「をもしろくはない」
とこたへました。父又「をまへは今までなせはう
ぼうへ火をつけてをもしろく遊んだのです」とい
しに「かにん〜」といひて物をいませなんだ
尙父母は此の後如何にと心配してをりましたに、
其の明る日より二三日は、誠に〜をちつきたる

態度で、何か物を考へているらしい様子でしたが四日目になりて、母飯をかしがんとて火をたきつけたのを見て利三は急に口を開き「お母さん火はあぶないなあー」といひましたそうでありませう。其の後日増にだんく〜と性質はかはつてきて、火を大切に取ひ扱ふやふになりましたそふでありませう。それから十四五日たつてから「ぼーや汝はたいへんにをとなくなつたから、をもちやを買つてあげやふ」と母がいひしに、彼れのいふには「ぼーはたく澤山あるからいらなさい」といつて其の後「ぼーは今日ははまさんと、みよさんと勝三さんにももちやをかへしてくるよ」といひて残らず返したそうでありませう。をもちやの事は彼れ自ら其の非を知りて返すやふになつたのであります、こうゆうふうになつた少しの手段のためにかつたので

ありませうが、一体此の子供の性質は如何なる者でありませうか、又如何して少の事に依りて是非善悪を省みるやうになつたのでありませうか、御考へつきになりましたならば御示教を願ひ度であります。

手毬歌 (其一)

備後國深安郡春日村

通信員 佐藤 龜 一

手毬と手毬と行逢て行逢て。一つの手毬がいふ事にやいふ事にや。こちらへこんせい奉公しよう奉公しようふ。奉公口はどどこかいな。奥の奥の御番所じや御番所じや。御番所娘はよい娘よい娘。わたしの晩からよめりさしようよめりさしよう。よめり道具は何々じや何々じや。箆筒に兩掛はさみ箱はさみ箱。これださしたてゝやるから

にやるからに。あとへ歸ろし思やんな思やんな。

あとの田地は誰にやる誰にやる。向のね夏にやつ

てくれやつてくれ。向のね夏は田地持ち田地持ち

田地廣めてくら建て、くら建て、。くらのまわり

へ松植へて松植へて。松の小枝へすいさげて鈴さ

げて。鈴がじきんじきん鳴る時にやなるどきにや

じいさんばーさん嬉しがる嬉しがる。

手毬歌

三河國西加茂郡筋生村字黒笹通信員

近藤とき子

一に俵をふまへて

二にニツコリ笑つて

三に盃手に受けて

四つ世の中よい様に

五ついつもの如くに

六つ無量息災に

七つ何事ない様に

八つ邸をひいろめて

九つてゝらに家立て、

十でとんと治まつた



四月の天地

川口孫治郎

園藝。上旬より亞麻、長瓢、圓瓢、王蜀黍、落

花生、馬鈴薯、西洋葱、除蟲菊、下旬より西瓜、

甜瓜、唐胡麻、里芋、やつがしら、などの種下し

楓、木犀、無花果、佛手柑などの植替に適す。

其折々。更衣、昔は月の朔より袷に更め、足袋

を穿かざるを例とせしが、今は太陽曆に依り舊式

を踏まず。

三日、恭しく、皇祖の遺烈を追慕し奉る。

灌佛會、陰曆八日は釋迦の誕生の日に當り、卯の花を供げ甘茶を煎て、其誕生の像に灌ぐ、今はこの月に行ふものあり。

十五日、來む十月十五日まで銃獵を止めらる。いとうれしき春に世は泰平となべての禽獸は、山野に、林に森に叢に、枯枝枯草さては苔、棕栢、毛髮、羽毛等を以て、枝の蔭、幹の空虛、岩の礫土の中など思ひくくに、或は横に或は斜に或は上向に巢を營む。

十日、陰曆三月三日に當り、年に二回の大退潮の其一日なり。

行け、汐干狩に籠さげて。驚く勿れ蝶は我足跡に跳ぬるとも、貝の古巢に宿借り蟹の轉ふが如く逃ぐるとも。此嚴めしき岩陰を探り見よ、其美しき砂の間に心せよ、彼麗はしき海藻の中を分ち見

よ、蛸蛤、いば貝、法螺貝、鳥帽子貝、鮑に螺、海扇、海貝あり、子安貝あり、牡蠣あり、車渠あり、稀には眞珠あり、わらわの友垣……海酸漿あり、僕の親友……海蝸君あり、況して、此等の貝と彼海布昆布、石蓴、庶尾菜、石形葉など籠にして、碧濤の碎けて白泡の激する此巨巖の項に起つて、萬里、一碧の春の海を望むに於てをや。

來れ、若草の緑を踏みて春の野に。惠風肌に暖にして方に之れ散策の好季節なり、書板を手にするもよく、採集罐を腋にするも寫眞機を肩にするも亦可、殊に一家相携ふる最もよし。

朝日に勾ふ山櫻、彼岸櫻に樺櫻、枝垂櫻や緋櫻、黄櫻、兎櫻、わのがむさく、全盛の頃。満山櫻花の吉野山、紅綠相交りし嵐山、萬綠叢中紅一點の名もなき深山の奥の奥、峯の櫻、麓の櫻、岸の櫻、

雨中の櫻、雨後のそれ、狂風の前のそれ、微風に
任かせるそれ、人丸赤人、降りて眞之定家俊成な
とは暫く言はず、勿來關に駒止めて散る花にそぞ

ろすさみし八幡太郎義家の懐
志賀の都の咲く花に昔をしの
ぶ涙濺ぎし薩摩守忠度の感、
胸に溢るる熱誠を唯兩行に單
めておろがむ備後三郎高德の
衷、幾代經ぬとも變らぬもの
は水の流れと人心、頼もしの
世の中や。

鮮黄なる油菜、からし菜の畑、
紫濃き紫雲英の田圃之に綾をなして翠色更に麗は
し。



家あり、垣根に婉麗なる桃、清楚なる梨、淡泊
なる李杏など開きて、孜孜として蜜蜂勵み、
路あり、可憐の堇菜、可愛の蒲公英、いとしの
烏豆などに、翩翩として胡蝶舞

ひ、
畔あり、蠶豆語り、豌豆笑ひ
て、團子の如き黒蜂汝々として
唸る。
横より望みて、遙に聳えて黒煙
を曳けるは、野中の工場の煙突
なるべく、近く麥の葉末に白帆
の突出で、寛くゆるぐは、川舟の
下るならむ。

高く登臨すれば、此麥綠菜黄の地に紫紅黑白相
交りたる大平原は總て一望の中に在り、佐保姫の

織りなせる錦といふは即ち之なり。

誠に四季に春あり地に花あるは、なほ、天に星あり、人に女性あり、物に文學あるが如きものか非耶。

此稿本月を以て一ト先一ヶ年を終了す、他日暇あらば更に續稿を起さむ。

筆者 識

櫻花さきにけらしな足曳の

山のカひより見ゆるしらくも

結婚論 (承前)

野 本 生 譯

此他、結婚に就いて、青年者の多く心を悩ますところのものは、世俗の所謂、其の女子の社會上の地位如何である。然れど、稱して、社會上の地位といふもの、其の實、是れが解釋を爲すことは

頗る困難なのである。世の家族たるもの多くは、其の預想せる結婚の爲めに、只管、其の社會上の地位を高めんとするに汲々として居る。併し、其は、時代然らしむる所の最も不幸なる惡習であると思ふ。亞米利加には貴族、平民といふやうな區別は、決して、出來ない。殊に現今は猶更さうである。然れば、吾人の所説は、目して極端とするの要なく、又米國社會に階級制度の存在を拒むの必要もないのである。何となれば、我國の社會てふ界線は、我等各箇人の充分なる保護の爲めに引かれて居るからである。是れ、如何なる大國にとりても、斯くあるべきが正當にして、又正當でなくてはならぬ。此國社會上の元氣、希望、及び國民の生命は、所謂、中等社會てふ一大階級の中に存して居る。此の共和國の骨子となり、纖維と

なるところの心意、物質、並に道德上の要素は、悉く、此の階級より來るので、現今、米國の家庭を飾るところの最良なる標本的な女流も亦實に此の中より來るのである。然れば、此の階級に對して誹謗を敢てするものあらば、其は已れ自ら、其の賢明なる人々の間に伍するの價値なき事を證明するに外ならないのである。今日、米國の女子にして、眞實にして、最良に、兼て又、極めて愛すべき模範的婦人は、華美、嬌奢なる富家の家庭にあらずして、却て、質素、和樂なる、所謂中等社會てふ一大階級より來るのである。米國婦人としての、其の最良なるものを我等男子に與へ、曾ては我等祖先の人々にとりて大なる助となりたるものは實に此の中等社會である。其の女子に戀愛の眞意を訓へ、客室にての立ち振舞を教ふる所のもの

五十八
も亦、此の社會である。其の子女に對して、妻となりての責任を教へ、母となりての心得を訓ふるは勿論、更に庖厨の實際的生活を教ふるものも、亦、同じく此の社會である。此等の女子は、或は馬車を驅ること能はざるべく、高價の衣服を纏ふこと、又能はざるべく、猶又、其の家族の收入に多少の貢獻をも爲し能はざるべし。然れど、現時は勿論、未來に於ても、米國社會の城壁となるべきものは此等の女子を措きて、他にないのである。彼等は米國の家庭を代表し、又其の樂しき家庭生活に於ける最も誠實に、最も善良なるところのものを代表して居る。又彼等は我等米國男子の爲めに最良なる妻女を供給するのである。予は米國婦人が現今其の占むる所、其の粧ふ所、並に其の正當に有せるところの其地位に代ふるに或る他の者

を以てせんとする多くの論者に同意することは出来ぬ。何となれば、彼等が現に占むる所の地位は吾人の、信じ、貴び、且、喜ぶところのものであるからである。彼等は只に現社會の女流に非らずして、更に是よりも優等なるものである。彼等は世俗の外觀的、皮相虚榮の生活には毫も經驗をもたない。其の知る所は唯、夫婦相和し、親子相愛し、心を合せ、行動を一にせる、和合一致の家庭生活の眞味である。世に父の如く、然く善良なる男子はなく、又、其の母に比すべき、然く愛すべき女子なしとは彼等の信ずる所にして、又世に善良なる男子多く、又同じ女子も多かるべしとは、又等しく彼等の信ずるところで、其の所信たるや元より正當なのである。此の種の女子を娶りて、其の妻となすものは、其の生涯を通じて、永く、

最幸福多福を享けることか出来る。

(未完)

櫻花ちりぬる風の名残には

水なき空に波ぞたけける

灌佛會

せく生

我が國にては四月といふ月は二月と全しく、宗教的事項まことに少し。只二四月のみならず、偶數の六八十等の月に少くして、奇數の月即一三五七九などいふ月に多きは、豈に面白き現象ならずや。其の如此理由は今明に之を知る由なけれども宇宙の現象は、凡て律動といふ原則に支配せらるるが故に、年中の人事現象とても、彼の四季あり晝夜あることの嘗て誤られし例なく、睡眠の次に醒覺來り、疲れては又眠るといふ如く、月々交

互に賑ふ月と寂しき月あるは、亦自然の妙用とも名つくべからむ。今本月中の面白きものをいはし釋迦の誕生日四月八日の灌佛會なるべし。

灌佛は浴佛とも佛生會ともいひ、此の日諸寺院に至れば、諸品の花を以て小堂を飾り、之を花御堂といひて其の内に小釋迦の像を安置し、甘草等の香水(甘茶、甘水、五香水)を灌ぐを見るべし。其の起原及び釋迦牟尼の話は他日にゆづりて、我が國に於ける浴佛の由来を語らんに、諸君の御承知の如く、今を距んぬる千三百年許昔の欽明天皇の御代、佛敎國の百濟より佛經佛像は公然と我が朝に遷されたり。それより漸次民間にも傳播せられ、推古天皇の時聖德太子等の銳意布敎を勉められし結果、漸く細々しき儀式をも輸入して、灌佛も此の時より行はれたるか如し(公事根源年中行事歌合など)

されども是れ民間等の私式にして、公に朝廷にも行はれしは實に彼の仁明天皇の承和七年四月(今六十二)律師傳燈大法師靜安を清涼殿に請じて始めて灌佛の事を行ふ(類聚)とあるを始とす。

此の儀式の様は公事根源江次第等に明にして又誰人も所在々々の寺院に其の實際を見るなれば今茲に記する要を見ず。されば進んで其の如何なる意味なるかを考へんに、是亦「四月八日は今是れ佛の生日にて人民佛の功德を念じ、佛の形像を浴す(摩訶利頭經)とあるにて明了なれとも、深く其の眞意を究むれば本來は彼の悉達太子が摩訶摩耶の胎内より生れ出でし儘の身體を清め奉りて各自に佛陀に對する功德とせるなるべし。

佛陀の寂滅後其の敎は益々弘まりて中印度の英主阿育王の宣敎僧派遣となりては、西方遠く地中

海の邊に及び、猶太人にも頗る此の教を奉じたるものを生じ（耶穌教も其の教義儀式等に佛）て、耶穌以前より洗禮を行へる有名の「ヨハネ」等あり。耶穌は實に彼を師とし彼に洗禮を受けたりとさく。洗禮は實に我が汚穢を去り我が罪障を淨めて、新に生れ替はる意味にて異教徒若しくは無宗教者の新に耶穌教徒たるべき時は必ず受けねばならぬ儀式なり。

されば一は教祖を灌ひて自ら功德とし、一は教祖（神の手）に洗はれて自ら其の功德を蒙るにて佛教と耶穌教とは相似たる儀式を異なれる意味に行ふものといふを得べし。

寡婦と愛子

（アーゲイング）

一 一一三 譯

私が田舎に住んで居りました時に、折り々村のある古寺に參詣しました、その陰暗い本堂や、朽れて崩れかゝりそうな石碑や、又は黒ぼんた樫作りの嵌板細工をした天井などが、年を數多經過しました處から、非常に打ち古びまして、何となく神々しく見えしました。で私はこんな場所に居ると、神聖な思慮を起す事も出来るたらうと考へました、此村では日曜日を安息日として、神に祈禱をあげる日として居りますが、誠に此日は平和の色が人の心の上に擴がりました、人の心も和らぎ心の奥に潜んでる宗教心が起るやうに思はれました。

一体私は神信心をずると言ふ側の人ではなかつた、只何となしにこんな天地の靜かな日に寺へ行くと、神を信ぜずとも、常なりは善人になつた

やうな氣がするのであります。

しかし、此寺の近邊には、財産の多い人や、貴族などが住んで来た處から、薄情だの、華美など、言ふ風が、此神聖な境に迄入り來んだを見ると今迄天界に上つたやうな感情を起したのが、こんな俗物の爲に、俗界に投げ出されたやうな心地かしました。

只群衆の中に、病身で齡の傾いた一人の老婆が、ありまして、此老婆は誠の耶穌教信者のやうに見えましたが、よく其有様を見ますと、何處やらに本からの貧乏人ではないやうな所が見受けられます、昔の名残か恐ばれるやうに、何處やら品格もありません、着て居る着物は粗末なものでしたけれど、嗜よく奇麗にして居りました、尙老婆が貧民の席に坐りせんで、獨り離れて神壇の傍に

座つて居つたのを見ますと、多少村の人から尊敬されて居ると言ふ事が、知られました。

此老婆は、兄弟や、朋友や、又時世にも後れまして、只獨り此世に残されて、天國へ行くより外に望のない者だと思ふと、私は氣の毒に思ひました、そして、私は老婆が力なく起き上りまして、其老體を動かして、祈をするのを見ます時に、何時も其手には祈禱書を持つて居りますが、其廢れた手、霞んだ眼では、文字を讀む事は出来ませんが、是はちうに覺えて唱へて居たのです、この哀れな老婆の慄聲は、牧師の聲よりも、「ラルガン」の響よりも、讚美歌の節よりも前に、天國に届くやうに説き勧めるかと思ひました。

私は田舎の寺院などを徘徊するのが好でありました殊に此寺は景色も中々好い所でしたから、私

は度々此處に遊びに來ました、此寺は小山の上にはありまして、其周圍を小川の流が一めぐりして遠く美しい牧場の間を流れて行きます、そして寺は水松がこんもりと繁つて、其木は皆此寺と同じ年を経たやうに思はれました、その間から「ゴシツク」式の尖塔が突と出て、その邊には何時でも鳥が群をして飛んで居りました。

ある朝、天氣が好かつたので、此處に遊びに來て、休んで居りましたが、其時二人の夫婦が墓を掘つてるのを見ました、其夫婦は墓場のごく遠いごく粗末な片隅の處を掘びまして、墓を掘つて居たのでした、其近邊には無縁の墓ばかりで、貧乏人や友のない者などが、雑つて葬られ居るのでありましたが、今此人夫が掘つて居た新墓は、あはれな寡婦の獨り息子の爲に作られたのでした、私は

これを見まして、人の身分の高下と言ふものが、其死骸に迄も及ぼすかと、獨り考へて居りました時、葬式の行列の近付て來るのを、知らせる寺の鐘か響きました、貧乏人の葬式でしたから、何もこれと言ふ飾りもなく、到て粗末なものでした、棺桶も到て粗末なもので、棺にかける一枚の衣さへありませんで、露出のまゝ、二三人の村人に擔はれて、一人の寺男が冷淡な顔付をして其前を歩行いて行きます。全体此葬式には、かざり物とすゝる泣男など、言ふものも雇はず、何となく淋しかつた、けれども、亡骸の後へ力なく付いて行つた一人の心厚い會葬者が居ましたが、それは死んだ者の、年老いた母であつた、私かまへに寺の神壇の階に座つて居つたのを見た、かの老婆でありました、老婆は一人の婦人に手を採られて居ました

其婦人は荐りと老婆を娼めやうとして居ります、又近隣の二三の貧人も、此葬式の行列の中に加はり、村の小兒は、亦手に手をとるかばはして附いて行きました、罪のない小兒達は、何の考へもなく走つて見たり、又立止つて見たり、又笑つたり叫んだりして、皆不思議そうに、此老母の泣顔を見て居ました。

此葬式の行列が墓場に近づいた時に、寺の牧師が玄關から出て來ました、身に白装束を着けて、手に祈禱書を持ち、一人の弟子を後に從へて居りました、けれど、此葬式は單に慈善的の者でした固より死者も金を残しませんし、老母も財といふものはなかつたから、葬式はまるで形式的に濟ましたれてたゞもう冷淡に、例の肥へた牧師は、寺の戸際より二三歩動いた計りで、その祈りの聲は、や

つと墓場に届いたか、届かぬ位でした、全体葬式と言ふ者は、何處迄も重々しく、且感動する禮儀であるへき儀式であるが、かゝる勢力のない滑稽じみたと言ふへき葬式と言ふものは、今迄耳にした事はなかつたのです。

私は墓場へ近づいた、棺は、今地上に落されて其上に「ジョージン・マース」行年二十六才と記されてある、哀れな此老母は人に扶けられて、死者の棺に跪いて祈禱をしようふと漸く其兩手は合せられたけれど、聲は丸で出ませんで、只其身体かゆすふられてると其唇のゆかんでる様子などに依て、吾最愛の子の、此世の名残（今埋め終ると再び見る事の出來ぬ、吾子の死骸を入れたる棺）を、堪へ兼ねた戀慕心を以て、見詰め居るのが分りました。

愈々棺をば、地面の中に埋める仕度に取りかゝつた。

若葉集

松の舎

●口で言つては詰らぬ話、書いては尙更纏まらぬ事に、若葉集とは、如何にも孝な名前が氣に入らぬと思し召すかは、知らぬないが、さりとは折節の陽氣に浮かされての無駄書、若葉を倒に御覽遊ばさば、自然と御合點の事なるべし。

●昨年頃歸朝されたる年若い醫學士のいふ。ブレストラウで私の下宿屋の娘（尤も年は五十許りでした）中々の國自慢でいつも「私に「どーですドクトル、獨逸は進んで居ませう、お國と比べてどーです」といふもんですから、私も負けぬ氣になつて「左様さ中々開けて居ます、けれども日本

の國では婦人は大抵三十迄に片付きます、年齢五十の令嬢などは、見たくつてもありませんね」と言つてやりました。

●日本では、婦人に年を聞など餘り心に懸ない様であるが、西洋では余程注意して居る、已を得ないで聞くをにしても、婦人に向つては自分の思つたよりもズット少く聞様にする事が必要であると誰かの話、さりとして三十の婦人に向つて「十八位でせう」などは、反て輕蔑した事となるべし。

●妙と云ふ字は、女邊に少といふ字を書く、一體佛の方でいふ妙といふ意味は、中々深奥でとても口以て云ふべからず、筆以て記すべからざる所、所謂、玄之又玄といふ有様をさして云ふのださうで、そこで何故女邊に少と書くかといふと、「少き女の亂れ髪、とくにとかれず、ゆうにゆはれず」

といふ處から來て居るとの事、

●そんなら妖怪の妖といふ字は如何です、矢張り女邊に天、妖怪の妖にも矢張り、深奥幽妙の意味が、合まれて居ませうかなといふ、處が此方は少し違ふ、女といふものは、大に作りに依つて相格が變る、殊に年少婦人に於て然り、年少婦人が其作りに依つて、大に其相格を變化すること、恰かも妖怪の如き所から、妖怪の妖の字が出來たなど得意氣に語る人のありしが、果して如何にや

●婦女と小兒とは、共に紅い飾を好むこと、毎日衣物や帶のことをいふこと、嫉妬の心強きこと、自我の念に富むこと、よくキャツ／＼と笑ふ事、而して、優し過ぎれば馴れ過ぎ、強過ぎれば泣き出す事、等あらゆる點に於て、相似たりといふ人ありて、吾は思はず打腹立てたり。



●學校、集會

●女子高等師範學校 卒業生は先月卅日午前八時より同校講堂に於て舉行せられ、文科廿三名、理科十七名、地歴専修科卅四名に各卒業證書を授與せられたりといふ、尙詳細は次號に報ずべし

●送別會、同日午後三時より在留學生諸氏發起となりて、卒業生の爲めに開きし由なるが例によりて頗る盛會餘興の薩摩琵琶など殊に面白かりし由

●建築中なりし講堂も悉皆出來上りて、従前の約二倍大となりぬ前庭の教室も悉皆工事終りたりとの

こと▲附屬小學校主事として北海道師範學校長横山榮次氏任命せられたり。

●東京府第三高等女學校 同校々長として青森縣師範學校長小林盈氏任命せられ既に先月より登校着々執務せられ居れりと。尙同校入學願書の受付は本日限り、入學試験は本月十四、十五の兩日

なりといふ。
●保姆傳習所 東京府教育會同所は愈本月十三日を以て卒業式舉行の由、受験者凡そ五十名中及第者卅一名に卒業證書持與せらるゝ由なるが同日は本科傳習所家事科傳習所の卒業式をも併せて行ふ由なり。

●三輪田女學校 兼ねてより合名高き三輪田眞佐子刀自は愈今回廻町四番町に女學校を設立し、大に女子教育の爲めに盡されんとすといふ。

因に記す同校建築落成は來年の見込なれども、假校舎に於て本月より既に授業を開始すべしとのことなり。

●女學校の災難 群馬縣高崎高等女學校に於ては、先月初め數十名の腸チフス患者を出せし爲め今以て休校中なるが、該病の爲め死亡生徒四名、

目下人事不省中の者六名に及び、職員にも傳染して歸國せし者ありとか、校長は爲めに進退伺を

出せり、又仙臺高等女學校も客月火を失し折節外

衣類等悉皆焼失せし者もありしとか、重ね々女學校の災害を耳にせしこそ、傷ましけれ。
●北海道の學校設備 北海道に於ては向ふ五ヶ年間に於て、上川に中學校、高等女學校、農學校を、札幌に工業學校を、小樽に高等女學校、商業

學校、水産學校を、函館に高等女學校を、釧路に中學校を設置することを同道教育會に於て確定したりとなり。

●佛教女子大學設置の議 此程東京佛教信徒聯合の名義にて、閑靜なる地位を選び佛教主義の女子大學校及び附屬高等女學校建設の議を内貴京都市長の許へ建議したりといふ。

●高等女學校長會議 文部省に於て來る五月一日より向ふ一週間を期し全國官公私立高等女學校長一同を召集し諮問會議を開く諮問事項左の如し

- (一)各學科目教授の進度を記録する方法
- (二)教員の缺員又は缺勤の場合に於ける生徒教授の方法
- (三)作法をして實際に適切ならしむる方案
- (四)教授上成る可く總體假名の使用を廢することの可否
- (五)補習科に於て小學校教員たるの豫修をなさしむるの得失
- (六)修身科中に於て操行點を付し又は別に操行點を定めて之を進級の條件中に加ふるの可否
- (七)學校と家庭との連絡を一層親密ならしむる方法

- (八)高等女學校令施行規則實施上不便なる點ありや若しありせば其の條項如何
- (九)技藝專修科の入學資格は如何なる程度に於て定むるを可とするか
- (十)高等女學校寄宿舎の適當なる構造如何

附 記

- (一)前記各號の諮問にして各學校に於て既に實施せる所あるものは其の狀況を書面にて報告すべし
- (二)第一號諮問に關し既に實施せるものは其の方法記録の様式及記入例を具し四月二十日限り差出すべし

●關東教育會聯合大會 關東各縣に於ける教育各團體は、教育開進上の問題に就き本年五月東京市に於て聯合大會を開く筈にて、主唱者東京府教育會會長より此程各縣の團體に向け賛同勸誘書を發したりといふ。

●文相の音樂會 菊池文相は先月十五日午後三時より音樂學校に於て音樂會を開き先づ「樂德」「形見の刀」の合奏あり、次に「ヴァイオリン」

オルガン、ピアノの合奏并に獨奏あり、又管絃の合奏等あり各國公使并に鍋島侯板垣伯等朝野の紳士六百餘名參會したり。

●婦人會の椿事 去二月廿三日信州都住村小學

校にて同地婦人會の開會ありしに突然會場なる二階の裁縫教室墜落して百五六十名の婦人火鉢と共に重り合ひて落ち來り六十名の負傷者を生じたりし由、女學校の災難といひ、此會の災難といひ誠に痛心の限にこそ。

●筆の雪下

●四月二十一日 幼稚園の始祖たる、婦人教育熱心家たるフリードリッヒ、フレーベル氏實に千七百八十二歳本月本日をして、獨乙チユーリンギャのオーベルツイスバッツハ村に呱口の聲を上げたるなり。生れて翌年、未だ其温容と親しむに至らず

して、早く既に慈母を失ひ、爾來辛苦つぶさに背め盡して殆んど獨力以て深奥の學理を極め、併み自ら高富の地位に居らずして世を終ふるまで、幼兒の友となりて、倦むことなかりし氏を紀念する爲め歐米至る處にフレーベル會を組織して、日に月に隆盛を極めつゝありといふ。

●不良少年の類別 東京感化院に於て不良少年

の類別を調査せしに左の如くなり。

- 愛情の過度 二六、四 學校生徒の不良感化
 - 冷淡なる教育 一七、九 地方風俗の結果
 - 朋友の不良 一五、三 無教育
 - 家庭教育の不完全 一一、一 苛酷の教育
 - 遺傳と認めらるる者 四、九 妾腹に生れし者
 - 愛情の過度たる實に驚くべく教育の完否、朋友の善悪が影響すると最も多きを見るべし。
- 郵便電信局女子雇員の成績 先達て來東京郵便電信局に於て女子事務員を採用したる結果は概

して良好なる由にて、欠勤の少きと時間中男子の如く怠慢ならざるとは特に注意すべき事なるが爲替の記帳の如きも其取扱數男子より多くとも劣ることなければ、俸給の廉さ點に於ても利益あり唯過失を恐れ萬事控へ目勝なる爲め一定の事務以外に手を出さざる欠點あり、採用數多きに失せず十人位を男子と混交し置けば、喋々の私語や醜態もなく至て勤勉なりと云ふ、因に記す目下同局女子雇員總數三十一名にして給料は二十錢乃至廿八錢なりとのことなり。

●過去現在の博士 博士現在者數及死亡者數に付き文部省の最近調査左の如し。

現在者數	死亡者數	合計
法學博士 四七	三	五〇
醫學博士 六九	三	七二
藥學博士 五	〇	五

工學博士	九一	七	九八
文學博士	三八	七	四五
理學博士	四四	五	四九
農學博士	一二	〇	一二
林學博士	六	〇	六
獸醫學博士	七	〇	七
合計	三一九	二五	三四四

●馬鈴薯の滋養分 馬鈴薯の歐洲諸國に輸入せられたるは阿米利加發見後英國のサー、ウオーター、ラレイが煙草と共にヴァージニアより持歸りたるに始まり爾來歐洲人の副食物として始んと缺く可からざるものとなれり此物の重に澱粉質より成ることは何人も熟知せる所なるが精細に之を分析するときは百分中水七八、三澱粉一八、四窒素質二、二脂肪質、〇一鐵物質一を含み同量の米に比すれば四分の一の滋養分を有する割合なれども米を飯と爲すときは多くの水を含み殆んど同一の

滋養分を有するものとなる又馬鈴薯を不消化なりと稱するは學說上何等の根據なきことなり但し馬鈴薯は澱粉多きを以て米と同じく體力を養ふに適し體の網膜を養ふに適せずされば肉に混へて常食となさば頗る適當なるものなり只注意すべきことは永く蓄へたる馬鈴薯にして己に發芽するに至りたるものはソラニンと稱する有毒性の物質を有するを以て食用に適せざることなり。(衛生談話)

地方通信

●北海道札幌女子高等小學校近況 目下總計五百名あり此内四年生は六十三名にして卒業後の方向は女子講習科北星女學校高等女學校等に入學する由而して年長者は十六七才最少十才なり。

●高等女學校假校舍 札幌大通 東二丁目の元

後藤合名會社製粉場跡を一時借受けんと大洋視學官同建物業地檢分をなしたるに光線悪しく目下露清學校となせる元偕行社の建物を借受けんと昨今交渉中なり。

●北海道學事會 北海道學事會は全道中の主なる校長連並に各支廳教育課主任屬等より組織せられ全道教員の統一を圖る一機關なり然るに本會をして無用の機關なりとて絶對的に廢止せんとする論者もあれどもこれ經濟上より生したる辯論なるが結極隔年一回開會するに成れり。

●北海道に於ける下田歌子女史の家政學 客年八月北海道教育會第十四回夏期講習會女子部に於て家政學を講せられたるが其の學識の宏遠にして例證の適切なる眞に懦夫をして起たしむるの氣慨ありき今其講述せられたる家政學は筆記編纂と

なりて廣く全道に好評を搏せられつゝあり。

●高等女學校設立認可 来る四月より開校せんとする高等女學校は二月廿七日付を以て文部大臣より認可せられたり。

東京より

▲桃の花は既に名残を留めず、梅は勢よく青々と新葉生ひ茂り候折柄、東台の邊の彼岸櫻は、遁早くも溢れん許り技もたは、に咲き揃ひ花のお江戸の有様、これから始まり申すべく、東京人士が花にかこつけての狂態もこれより演ぜられ申すべくと存じ候。さて例によりて、先月來當地の動靜をらまし御郵信申し上げべくと存じ候。

▲例の菅公一千年祭が、筑前大宰府に於て、昨月二十五日より本月廿五日まで催うされ候に付いて

は、當地龜戸神社及湯島天神に於ても、大祭執行の擧有之、龜戸神社は既に先月廿三日より始まり湯島の方は本月末より一週間舉行の由、てこそひやら御輿やら、はやしやら夫は、大變な賑の由に候。菅公も、一千年後の今日、此大賑を以て記念せられ候事を御承知相なり候は、定めて地下に御満足遊ばさるゝ事と存じ奉り候。

▲久しく疑問に屬したりし、第三高等女學校校長も念、青森縣師範學校長小林盈氏と定まり候。序に申し上げ候、同校へ奉職志望を申し出で候處の女教師の數は、凡て五十幾人に上り候由、地方にて一人の女教師を得んがため、困難に困難を感じ居り候折柄東京の學校といへば、招かずして雲の如くに集來すること如此に候。何人か、申し候、投機的思潮の致す所、男女共に然りと。

▲諸學校は、大低先月廿九、卅、卅一日の間に卒業式を舉行致し候由に御座候。

▲高等女學校校長會議は、來月一日に始まる由、中學校長會議、高等學校長會議も、本月より來月初旬の間に分かれ、關東教育大會も、來る六月上野に開會せらるゝ由に候。

▲先月は東京市内、麻疹の大流行を來し、大低の子供は襲はれ申候。神田區内丈で二百幾人の患者に上り候由。死亡數は大低二ペルセントなりし由に候。

▲先月は、上旬よりかけて彼岸の中日まで、春氣洋洋と進み來り候處、中日を過ぐると等しく何處かに低氣壓舞ひ下り候由にて、氣候一變急激なる冷氣を催うし、廿三四の兩日の如き襦を出れば、雪積ること正に二三寸、朝來霏々として折柄

散りかゝる梅花を紛らせ候は、や時分時ならめとて、漸く薄化粧を凝らして、笑ひ初めんとせし、櫻花も、此有様に吃驚して、偕てはまだ早かりしよと、狼狽て一時姿を隠し候由、花神より傳言有之候。

以上

海外彙報

●幼稚園と小學校との聯絡 萬國幼稚園協會ヲ非ラデル
フイア支會は昨年十二月三日、同地師範學校に於て例會を開き、如上の題目につき研究せり。先づ サラー、フイツブル嬢は、幼稚園の見點より論じ主として教授の二方法。詩的即表號的方法と科學的方法とに付きて述べ、表號的教授法は是非とも科學的方法に先きんせざるべからざる所以、而してこは專ら幼稚園に關するものにして、小學校にありては主として後者を用ふべきものたるを説きたり。次ぎて、ザヨリツ、ホッラー氏は、初等學校の見點より論じて曰く、現今幼稚園保母と小學校教師とは時々反日嫉視を以て相對せるが如きことあれども、二者は互に相知り

相助くることを勉めざるべからず、余は思ふ、若し幼稚園に於て遊戯と共に仕事に對して従順、獨立、忍耐等の習慣を、幼児に得しむる様訓練したらんには、小學校教師の教育事業は今一層容易に施さるゝとを得ん、次にノルスエスト學校長ドクトル、コルマン氏立ちて更に、ホ井ラー氏の説を輔述し、且つ曰く、兒童は、皆四才よりして善良なる教師の指揮誘導の下にあるべしと願ふ利益あることなり、余は兒童に取りては幼稚園科を設くることを望む云々、フアンシー、ロー嬢は、幼稚園にも小學校にも經驗を有せる人、幼稚園に於ける幼児の身体的精神的道德的訓練の如何に小學校に助けを興へたるかを論じ、更に曰く、兒童の學校に來るや、感覺は鋭敏なり手指は練磨せられ、觀察力は敏健となり、記憶發現の力は培養せられ、教師の指揮に従ふ事の伶俐なる、到底家庭より來れる幼児の及ぶ所にあらず、加之彼は既に數學、歴史、地理、國語等を學ぶべき根本的概念を有し、忍耐の習慣、労働の好愛、知識を求め、正義をなさんとする慾望は彼の全生涯を通じて價值を有するに至る云々。ジョン、ドルハム夫人は、表號的教育といふことに付きて保姆と學校教師とは、果して同様の意に解せりや否やといふ疑問を呈出し、更に曰く一般にいへば保姆は大に其効用を説くも、教師は之を否定す、而れども、これ互に相知らざる結果のみ、若し詳に之を了解せしならんには、初等高等の學校教師は必らず之を賞賛するに至らんと。

最後に、アンナ、ウカリアム夫人は、初等小學校教師の多数が、幼稚園より來れる兒童に付きて、不満足を感じずる理由として、數

言を述べたり、曰く幼稚園より行く幼児は、既に一定の心力、熱練の發達を有せり、然るに教師は、此兒童の爲し能ふ所、此兒童に要求すべき所のものを知らず、故に此兒童に課する事は、易過ぎる様になる、これ即教師生徒の共に迷惑を來す所以なり、之を除く途は他なし、教師は小學校に従事する以前に於て、先づ幼稚園にて爲せる所、爲べき所のものを知り、善良なる幼稚園を觀察し、其保育法の大体に通ずることを勉むるに在り。

●幼稚園問題 南部教育大會の幼稚園部は、昨年十二月廿七日、コロンビアにて開會せしが、其問題として出でたるは左の如し、『後年の教育の準備といふ立脚點より見て、最も緊要なる幼稚園の形狀は如何にあるべきか』『近世批評の光に照らして、幼稚園保育法には、如何なる改良を必要とするか』

新刊紹介

▲新文 (二ノ二) 本郷區森川町一、言文一致會發行
 此は言文一致會の機關で、至極眞面目で淡白で併も中々面白い雜誌である。本號には久津見氏の唯物論の趣味と結局、前號から續いて面白く讀まれ、堀内氏のおは雪、奥さんの苛める繼子に對する乳母の情愛は、一寸感情の鋭い讀者を泣かしめるであらふ、教育界の時評は同感、ネルソン將軍の傳記、教育的に出來て面白い (二部八錢、郵税一錢 毎月一回)

▲兒童新聞 (一) 本郷區本郷五ノ二二 兒童新聞社發行
 此は一寸体裁が婦女新聞の弟の様に見える。面白い繪も澤山、記

事も澤山、(一部一錢五厘 郵税不要 月三回)

▲女界(一) 神田區駿河臺西紅梅町六 白鳳堂發行

新に發刊せられたる美麗の婦人雜誌、論說には欄橋女史の女子教育所感見るべく、學藝には數多の評釋類あり、文苑頗る賑にして家庭にも有益の文字多し其他漫録、小説、姬かつら、雜報等の諸欄に分つ、吾人は茲に我等の友を得たるを喜び、將來健全の發達を祈る(定價一冊十錢 郵税一錢 月一回)

▲英學新報(一ノ九) 神田區表神保町三 英學新報社發行

英語獨修者の好伴侶、號を重ねるに從ひ、愈有益の文字に富み行くが如し、本號載する所肖像にはジョンバンヤン及小傳、社説、花文字の使用に付きて、其他寄書に會話に注釋に時報に懸賞英作文に、滿紙錦繡の裝といふべし(定價一冊八錢 郵税五厘 月二回)

▲日本婦人 第二八、九號 帝國婦人協會

▲令德 第四卷第二、第三 令德會本部

▲東京教育雜誌 第一四七號 同發行所

▲婦人新報 第五八、九號 同發行所

▲秋田縣教育雜誌 第一一五、六號 同會事務所

▲教育實驗界 第九卷第四號 育成會

▲大八洲雜誌 第一八八號 大八洲會館

▲衛生讀話 第一四號 通俗衛生茶話會

▲苦學界 第一號 苦學社出版部

▲婦女新聞 每號 全社

▲山梨教育 第八七號 全社

▲女子の友 第一一〇、一號 東洋會社

▲學生俱樂部 第二卷第六號 育成會

▲教育實驗界 第九卷第五號 全社

▲日本の小學師 第三九號 國民教育社

▲東洋哲學 第九卷第三號 東洋哲學界

▲教育時論 第六〇八、九、十號 開發社

▲牟婁新報 每號 全社

▲六合雜誌 第二五五號 日本ゆにてりあん弘道會

▲なんな 第二卷第三號 大日本女學會

▲健康の葉 第一〇號 同社

▲うらにしき 第一一三號 同社

▲上野教育會 第一七三號 同會

▲福島教育 第八二號 福島縣教育會

▲通俗衛生 第四四號 大坂私立衛生會

▲大坂府教育會報 第一八八號 全會事務所

會報

幹事會 三月十二日午後三時より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會來四月廿日開會すへき第七總會に關する件を決議せ

寄附金

一金拾錢也

謹ミテ厚意ヲ謝ス

入會

近藤とさ君

東京ノ部

麴町區土手三番町三井内

本郷區本郷三丁目二四岩堀傳之助方

地方ノ部

香川縣高松市高等女學校

長野縣上高井郡須坂町字常磐町

長野縣上田木町一〇四五

轉居

東京市本郷區金助町七三へ

大和國南葛城郡御所町南町吉川康久方へ

臺灣澎湖島臺灣銀行出張所へ

岡松磯次郎
田中織衛
寺島さみ
神林貞子
保坂ふさ
富永その
早川しか
小倉みき

一金五拾錢	自三十四年四月	岡本たか
一金拾錢	自三十五年一月	神通せき
一金三拾錢	自三十五年一月	土川五郎
一金五拾錢	自三十五年一月	野尻てつ
一金五拾錢	自三十五年一月	小谷野千代
一金五拾錢	自三十五年一月	川口雪枝
一金壹圓	自三十四年七月	佐藤壽鯉
一金五拾錢	自三十五年一月	外山しげ
一金五拾錢	自三十五年一月	岡澤やへ
一金五拾錢	自三十五年一月	柴田かつ
一金五拾錢	自三十五年一月	竹澤ささ
一金五拾錢	自三十五年一月	林ふみ
一金五拾錢	自三十五年六月	松村ひさ
一金壹圓拾錢	自三十五年十二月	桑岡ます
一金壹圓	自三十四年七月	鳥海トゆん
一金五拾錢	自三十五年一月	小谷野かれ
一金壹圓	自三十四年四月	宇佐美はる
一金拾錢	自三十五年一月	杉本みさを

自一月二十一日會費領収
至三月二十三日

一金參	一金參	一金參	一金參	一金五	一金五	一金參	一金五	一金五	一金六	一金六	一金五	一金六	一金六	一金壹圓二拾錢	一金二拾二錢	一金二拾	一金壹圓二拾錢	一金三拾
拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢
自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十四年
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

大野朝比奈	成瀬きよ	近藤ばい	吉川さい	小關せい	柴岡てる	早川いし	新海ふみ	石川いし	小杉ささ	勝田すみ	加藤せつ	武藤むめ	海野きみの	山越忍空	小幡たみ	津原ちか	佐久間米	高山ふみ
-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------

一金六拾錢	一金五拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓拾錢	一金壹圓拾錢	一金壹圓	一金二拾錢	一金四拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金八拾錢	一金三拾錢	一金三拾錢	一金壹圓	一金壹圓	一金五拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢
自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

平岩繁拾	合志章子	上野かく	アスパン	今井ため	杉木まつ	中澤よし	重野あや子	林ふみ	福田米	大西永太郎	安本こすゑ	川村すみ	中山すま	瀬川さも	野口なほ	永田よし	柴崎けい	永田らく
------	------	------	------	------	------	------	-------	-----	-----	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------

婦人の子と第二卷第四號

一金四拾錢	一金四拾錢	一金四拾錢	一金四拾錢	一金四拾錢	一金二圓四拾錢	一金五拾錢	一金二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金三拾錢	一金二拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢
自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

坂元あき	重田ふち	藤宗きく	小島はま	平塚さだ	須田きよ	吉田たみ	長谷川阿喜	山岡てる	田坂りつ	東條順	山田みつ	岡松磯次郎	横山まさ	吉田はる	貴地すが	菱沼こなつ	岡本ちか	丸山かく
------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	-----	------	-------	------	------	------	-------	------	------

一金五拾錢	一金四拾錢	一金四拾錢	一金參拾錢	一金拾錢	一金拾錢	一金拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢	一金拾錢
自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月	自三十四年四月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

村井あい	安東てい	高木なみ	大津まん	木村寅恵	富田やちよ	山田せん	相川みれ	根本まさよ	岩田ゆき	宮崎もさ	小林ふし	藤岡さき	池袋すか	下瀬たつの	廣瀬たみ	寺本みとし	寺島さく	波邊すみ
------	------	------	------	------	-------	------	------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	------

一金壹圓四拾錢	一金五拾錢	一金二拾錢	一金五拾錢	一金壹圓	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓三拾錢	一金壹圓拾錢	一金壹圓貳拾錢	一金六拾錢	一金五拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金七拾錢	一金三拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢
至三十四年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

須田きよ	吉田たみ	長谷川阿喜	清水たづ	嶺ふき	野副さよ	中井一馬	山口まさ	井上千代	田邊はる	大友のぶ	谷出部トゆん	野村ぎん	波多野あぐり	波多野さく	若尾くす	安野みち	金岩薫	儀俄ふみ
至三十四年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

大羽ひさ	伊藤弘一	村山つね	吉武しやう	堀越源次郎	立花はる	太田まつ	尾田けい	今立祐	伊藤せい	波佐谷みち	西島富壽	高山ふみ	市原すみ	保坂ふさ	江藤三保	印東おさな	貴地すが	田中織衛
至三十四年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月	至三十五年三月
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

一金壹圓拾錢	一金壹圓	一金壹圓	一金五拾錢
自三十五年十二月	自三十五年七月	自三十五年七月	自三十五年一月

喜多見さき	武田さき	南摩まき	後閑菊野
-------	------	------	------

追つて右誤謬等有之候節は御手数ながら御一報相なりたく候。



謹告

玉稿御寄送之節は開き封にて二錢切手御粘用にて宜しく候。
 玉稿は毎月十五日までに御寄贈相なりたく候。

會 員 名 簿

會員名簿

◎ハ幹事退職者
○ハ幹事留日者

在京會員

麹町區

- 全 番町小學校
- 全 稻葉
- 全 大橋 いぬ
- 全 内田 かれ
- 全 後藤 りん
- 全 東京女學館
- 全 華族女學校
- 全 迎 てる
- 全 ○野口 ゆか
- 全 ○小關 せい
- 全 ◎齋藤 みれ
- 全 志賀 かま
- 全 富士見小學校
- 全 吉川 さい
- 全 中野 よれ
- 全 山崎 彦八
- 全 山下 つや
- 全 山口 きよ
- 全 清水 あい
- 全 平野 まち
- 全 二葉幼稚園
- 全 麹町小學校

- 全 藤屋 よし
- 全 早川 いし

- 全 飯田町四ノ一
- 全 五番町九嘉納氏方
- 全 土手三番町三井内
- 全 三番町七〇
- 全 四番町一四
- 全 三番町六一
- 全 内幸町一ノ三
- 全 中六番町二九
- 全 平河町六ノ一三
- 全 上六番町一
- 全 飯田町六ノ二二
- 全 平河町四ノ一三
- 全 平河町六ノ二二ツラージング
- 全 トン力
- 全 五番町五
- 全 東京府第一高等女學校

- 全 高橋 しげ
- 全 野村 すき
- 全 安藤 ゆき
- 全 紫間 照
- 全 志村 たか
- 全 平田 いよ
- 全 石川 いし
- 全 井上 千代
- 全 岡松磯次郎
- 全 丹所 啓行
- 全 相馬 宗孝
- 全 津原 ちか
- 全 長興のぶ子
- 全 中島 敏
- 全 鍋島 いし子
- 全 野口 なほ
- 全 松井 正子
- 全 御厨 守忠
- 全 廣瀬 銀
- 全 珠 乙女
- 全 伊藤 貞勝
- 全 市川 源三

- 全 常磐小學校
- 全 日本橋區
- 全 淡路町二ノ四
- 全 淡路町一ノ一
- 全 駿河臺南甲賀町一〇
- 全 駿河臺北甲賀町一〇釘宮剛方
- 全 仲猿樂町七難田方
- 全 淡路町二ノ四
- 全 鎌倉町三
- 全 猿樂町三ノ二
- 全 錦町一ノ一川瀬方
- 全 駿河臺北甲賀町一七清水方
- 全 淡路町一ノ一
- 全 一ツ橋幼稚園
- 全 篠原小學校
- 全 錦美幼稚園
- 全 高等師範學校附屬小學校
- 全 東京女學校
- 全 紫間 照
- 全 野村 すき
- 全 高橋 しげ

- 全 星 つれ
- 全 種村 ゆき
- 全 東 くめ
- 全 竹澤 さこ
- 全 深津 しづ
- 全 乙竹 岩造
- 全 近藤 茂
- 全 丸山 かく
- 全 多田房之輔
- 全 多田 きせ
- 全 石川 よれ
- 全 岩川 ひさ
- 全 片桐 くら
- 全 矢野ふさよ
- 全 小谷野かれ
- 全 安東 エれ
- 全 喜地 すが
- 全 關 千秋
- 全 鈴木れい子
- 全 橋本 はな
- 全 貫 しげ
- 全 大友 のぶ

婦人の子と第二卷第四號

養徳幼稚園
全
全
阪本小學校
全
全
全
全
全
全
城東小學校
全
全
久松小學校
纏壳町一ノ四平井彌七内
元大工町八加藤幸太郎内
南茅場町五
小舟町二ノ二
京橋區

池邊 千東
相賀 よし
小杉 郷
千葉 秀
岡田 ちよ
大野朝比奈
中島 行徳
喜多島 周
妹尾 明
脇屋 なほ
田原 かれ
永田 かい
水門 みつ
林田 もと
加藤 たけ
吉田 かう
塚越 かが

木挽町二ノ一三
新榮町四ノ二
南飯田町一
芝
芝麻布共立幼稚園
全
全
頌榮女學校
三田通り新町一三
櫻川町六
麻布區
全
宮上見町二六
飯倉三丁目東京天文臺官舎
飯倉片町二七
赤坂區

羽田 幸
吉田 たみ
木寺 ふさ
星野 ひさ
勝田 すみ
田中 ふさ
吉田 しう
岩崎 たつ
近藤 はま
千田 孝壽
吉住幾久江
野澤 あい
寺尾 きく
妻沼 こなつ

青山小學校
全
全
青山北町四ノ一〇
青山南町五ノ二九
四谷區
四谷幼稚園
四谷彰徳幼稚園
全
愛住町七六
牛込區
河合幼稚園
全
牛込共立幼稚園
全
東橋町二〇
南橋町一九
辨天町一一
神樂町二ノ一一
横寺町二九
神樂町二ノ一七
小石川區
日本女子大學校

伊藤いつき
相川のふ
櫻井 光華
秋山 七朗
三須 さし
三好 芳
水上 よし
高橋 いち
河合 ちよ
三宅 はな
瀧澤 よう
堤 てつ
大和田りよう
尾崎 勝巳
中桐雄太郎
後藤いさ
淺田 つる
關谷 いま
筈井 志賀

簿 名 員 會

東京府第二高等女學校	岩本 ふく	全
全	岡本 たか	全
全	岡田 ふみ	全
全	丸山 さめ	全
東京府女子師範學校	土川 五郎	全
全	永田 けい	全
全	野尻 てつ	全
全	前田 捨松	全
全	小谷野千代	全
全	神通 せき	全
東京盲啞學校	小西 信八	全
小石川幼稚園	山田 千代	全
餌差町三四	石川 ふき	全
原町一二三	伊澤 丑三	全
高田豊川町四三	樺山 常子	全
日白臺岡部氏方	藤澤 臯月	全
指ヶ谷町一一七	有川 ひさね	全
大和町二七	師岡 伸	全
久堅町四八	關口 たけよ	全
木郷區		
冲靜幼稚園	古市 靜	全
高等師範學校	岡山 秀吉	全
女子高等師範學校	伊藤 弘一	全

市原 壽見	全
宇立 裕	全
伊藤 せい	全
池袋 すが	全
岩田 ゆき	全
林 外浪	全
林 蝶	全
波多野 徳	全
波佐谷みち	全
◎林 ふみ	全
◎羽田 晴	全
西嶋 富壽	全
堀越源次郎	全
富岡 龜門	全
鳥居拔三郎	全
藤室忠次郎	全
富田八千代	全
岡田 起作	全
大羽 ひさ	全
尾田 けい	全
太田 まつ	全
大嶋 小春	全
奥山 ぼる	全

大津 まん
渡邊 すみ
神田 順
加藤 節
吉田 信太
吉武しやう
吉村 千鶴
高橋忠次郎
武田 きん
立花 ぼる
高山 ふみ
高木 なみ
榎尼かなる
根本まさこ
南摩 まき
中村 五六
村井 あい
瓜生 繁
内田 たね
黒田 定治
窪田 八重
谷田部 順
安井 てつ

婦人の子と第二 第四號

全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全全

矢作 てつ	山口西三郎	保井 この	山田 せん	町田 則文	◎松村 ひさ	藤岡 さき	小池 みつ	後閑 菊野	小々高みさを	小林 ふと	寺本みよし	寺嶋 さく	○雨森 鋼	安東 てい	相川 みね	赤江 よれ	齊藤清太郎	齊藤鹿三郎	佐方 鎮	喜多見さき	木村 寅恵	宮崎 もと
全	全	全	全	全	全	全	全	全	誠之小學校	全	全	駒込淺嘉町九九	龍岡町三四東氏方	金助町七三	本郷三丁目二四岩瀬傳之助方	弓町一ノ一四	龍岡町三四	春木町二ノ二三	駒込追分町三〇奥井邸内	下谷區	西町小學校	全
新免 義男	下村三四吉	斯波 やす	◎清水 たつ	下瀬 龍乃	東 基吉	廣瀬 他美	森川 清	森 岩太郎	西村 さだ	小向 きみ	青木 せい	今井 つな	徳永 ふく	富永 その	田中 穢衛	福田 米	藤村 いさ	新海 ふみ	敷藤 きん	和田 くら	柴崎 けい	
根岸小學校附屬幼稚園	下谷小學校	谷中清水町二〇	仲徒町三ノ七〇	龍泉寺町三七九	池ノ端七軒町三八	淺草區	柳北小學校	全	全	全	淺草幼稚園	千束町二ノ一四〇	表町幼稚園	本所區	中和小學校	江東小學校	全	全	全	深川區	深川小學校	全
渡邊 こゝろ	三谷 保	春田 隆	横田 けい	永田 えし	村田 みち	福井 榮	◎佐々 ぐき	澤 ぬい	三田 利徳	保科 修	淺井 ぼつ	樋口 みね	川崎 みつ	服部 たき	山田 きみ	福尾 きく	安藤 たか	上遠野 あい	金子 きた			

簿 名 員 會

全
明治小學校

地方會員

東京府

北豊嶋郡南千住町七七
北豊嶋郡王子元瀧川村一三一
青梅小學校附屬幼稚園
荏原郡大崎村字下大崎三〇六
北豊嶋郡南千住町四
北豊嶋郡南千住町九三六
北豊嶋郡南千住町大字千住南
一三一
豊多摩郡内藤新宿花園小學校
北豊嶋郡南千住町太字南二六
北豊嶋郡南千住町元通新四一
北豊嶋郡王子村元王子一五
荏原郡大井村三一四四
北豊嶋郡南千住通り新町四六
北豊嶋郡王子村一二八六
神奈川縣
相州横須賀横須賀小學校
神奈川縣鎌倉町小町室戒寺内
神奈川縣鎌倉町字小町

佐久間よれ
矢澤 わさ
福田 ふく

石山 ひさ

印東おさな

長谷川 春

服部 繁子

若林 みつ

横山 まき

吉田はる子

吉澤 さも

蘭田 梅

永田 らく

松田 さし

手塚不二夫

淺野 てふ

坂野 すゝ

大橋みなか

大山 千代

鶴田いの子

横濱市伊勢町二ノ五五
佐和山方

相州横須賀港横須賀小學校

相州横須賀港横須賀小學校

横濱市元街小學校

神奈川縣三浦郡横須賀小學校

横濱市伊勢町二ノ五五

相州横須賀港横須賀小學校

相州横須賀港横須賀小學校

相州横須賀港横須賀小學校

神奈川縣高座郡松林村菱沼
太田市五郎方

埼玉縣

埼玉縣川越町松江町三〇六

埼玉縣高等女學校

埼玉縣浦和町一三五

埼玉縣大里郡熊谷町幼稚園

千葉縣

千葉縣千葉町

千葉縣千葉郡中野郵便局區内

栃木縣

下野栃木町高等女學校

宇都宮栃木縣高等女學校

下野國足利町駿阿寺

栃木縣師範學校

工藤 ふし

松岡 さち

藤宗 きく

福島 ちか

小嶋 はま

佐和山たか

坂本 秋

重田 ふち

平塚 貞

平岩 繁治

馬場 さら

津原 はま

矢嶋 させ

北村 いさ

筒井はる子

小幡たみ子

新橋 きく

建部 よれ

山越 忍空

佐原 貞

下野國鹽谷郡北高根澤村
宇津氏方

栃木縣足利幼稚園

群馬縣

群馬縣佐波郡壇町

群馬縣高等女學校

群馬縣高等女學校

群馬縣高崎幼稚園

群馬縣高崎幼稚園

群馬縣前橋市石川町六

群馬縣前橋幼稚園

群馬縣高崎市堰代町四九

静岡縣

静岡縣師範學校女子部

静岡縣駿東郡玉穗村字グミ澤

静岡縣静岡市城内市立

静岡縣幼稚園

静岡縣三嶋町三嶋高等女學校

静岡市高等女學校

愛知縣

名古屋市高等女學校

尾張國東春日井郡瀬戸町

尾張國熱田玉井一〇五

滋賀縣

滋賀縣大津高等女學校

廣瀬 まさ
關 壽賀

岩村 ちつ

鳥海トゆん

田邊 なか

富岡 むめ

野村 ざん

松村 貞

清水 喜代

大村 米

立道 操

松山 いつ

松木 かつ

江藤 みほ

岡 都子

坪内 きく

中野 芳枝

桑村 ます

宮武 みよ

會 員 名 簿

全	愛媛縣宇和島高等女學校	東條 順	土谷 ふで	全	大分縣高等女學校	宮地 榮	石川 縣	石川縣師範學校	石川 縣	石川縣金澤市下本多町五番町二	山田 みつ
全	愛媛縣			大分縣							
全	香川縣三豊郡觀音寺村	大西水太郎		熊本市五福幼稚園	大塚 さだ		山梨縣	山梨縣師範學校	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	内田 すえ
全	香川縣高等女學校	蒲生 さと		熊本縣王名郡有明町	田中 梅		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	篠原 しづ
全	香川縣綾歌郡阪出町幼稚園	中川 こけい		熊本縣尚綱女學校	野原 つね		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	進藤 つる
全	香川縣高松市高等女學校	寺島 さとみ		肥後國菊池郡障内村	合志 章子		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	進藤 ちい
全	香川縣綾歌郡宇多津今市	澤村きみゆ		大分縣下毛郡中津町大字	石島 廣		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	金岩かをり
全	山口縣西町二百三十九番地	安藤 さつ		古金谷ノ町	瀧 ぶゆ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	外山 茂		大分縣高等女學校	宮地 榮		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	岡澤 やへ		伊豫國周桑郡壬生川町	越智 きみ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	太田 ため
全	山口縣西町二百三十九番地	尾崎 萬龜		伊豫國宇和島龍華前町	大平 みら		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	村川 愛		愛媛縣今治高等女學校	山崎 なみ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		愛媛縣西宇和郡神山小學校	清家みすゑ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		清家一郎方	清家みすゑ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		高知縣	依岡 あい		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		高知縣立高等女學校	依岡 あい		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		福岡市博多東中洲一九	野崎 ひで		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		福岡縣遠賀郡若松町大字	柳川 松		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		若松八三ノ二	小笹 文藏		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		筑前國博多行町三六	岸高 たき		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		福岡縣小倉高等女學校	久芳 龍藏		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		筑前國若松木町一	望月 くに		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		熊本縣	大塚 さだ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		熊本市五福幼稚園	高木 まつ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		熊本縣師範學校	田中 梅		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		熊本縣王名郡有明町	野原 つね		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		熊本縣尚綱女學校	合志 章子		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		肥後國菊池郡障内村	合志 章子		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		大分縣下毛郡中津町大字	石島 廣		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		古金谷ノ町	瀧 ぶゆ		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	
全	山口縣西町二百三十九番地	久保 ます		大分縣高等女學校	宮地 榮		山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	山梨縣	山梨縣北巨摩郡江草村	

婦人子ども第二卷第四號

富山縣

富山縣富山市總曲輪
越中國下新川郡泊町
柳 きん
松田 よし

新潟縣

新潟縣長岡市女子師範學校
星野 きく

全 加藤 萬代
村山 いく

全 中原 ふく
中野 豊記

新潟縣高田高等女學校
宇佐美 ぼる

全 赤穂 千春
矢野 そう

新潟縣師範學校
重松 綾子

佐渡國相川山ノ神三菱社宅
茨城縣

茨城縣水戸市高等女學校
田井 敏三郎

茨城縣眞壁郡關本町
内藤 この

茨城縣北相馬郡相馬町字藤代
内藤 さく

山形縣

山形縣米澤高等女學校
福地 くま

山形市高等女學校
關 しむ

秋田縣

秋田縣南秋田郡土崎小學校
秋山 さみ

宮城縣

仙臺市琵琶首町
宮城縣高等女學校
宮城縣師範學校
仙臺市東六番町
仙臺北一番町四〇
仙臺市東四番町六〇
青森縣
陸奥國西津輕郡深浦村
佛苗學園

仙臺市東四番町六〇
青森縣
陸奥國西津輕郡深浦村
佛苗學園

仙臺市東四番町六〇
青森縣
陸奥國西津輕郡深浦村
佛苗學園

仙臺市東四番町六〇
青森縣
陸奥國西津輕郡深浦村
佛苗學園

仙臺市東四番町六〇
青森縣
陸奥國西津輕郡深浦村
佛苗學園

仙臺市琵琶首町

宮城縣高等女學校

宮城縣師範學校

仙臺市東六番町

仙臺北一番町四〇

仙臺市東四番町六〇

青森縣

陸奥國西津輕郡深浦村

佛苗學園

北海道函館會所町五九函館

北海道的國米町一三三

北海道的石狩國上川町旭川町

北海道的石狩國下通十八丁目七號

臺灣總督府民政部第二種

官舎第六號

臺灣宜蘭門外官舎

臺灣澎湖島臺灣銀行出張所

臺灣鹽水港廳官舎

臺灣宜蘭官舎

臺灣臺北縣臺北石防街

一ノ二二

海外

朝鮮京城尋常高等小學校

朝鮮元山津日本領事館

米國

早川 ちやう

中村 しげ

村山 つね

野副 さよ

里村 なほ

嶺 ふき

千崎 如幻

武藤 ウメ

福富 りき

儀俄 ふみ

波多野 あぐり

小野田 みほ

小倉 幹

村上 先

櫻川 市子

水主 こゆう

早川 清範

瀬川 さも

岡田 光

追って誤謬の個所有之候節は御一報相なりたく候

御宿所御姓名等變り候節は早速本會わて御通知相なりたく候

新刊報

高等師範學校訓導遊佐誠甫氏編

學業操作考查必携

○附錄 小學校令及施行
クローズ洋裝製
全一冊規 定價 金十八錢
郵稅 金四錢

生徒の學業操作を査定し老慮することは教育上の要務にして一日も忘るべからず然れども其法にして密に過ぐれば繁雜厭ふべくして持續すべからず簡に過れば疎略捕ふべきなくして用を欠くに陥るれば簡便にして明確なるべく行ひ易くして利する所多からんこと今日教育者の一般に望む所なり此書は著者が多年經驗の結果を同職諸君に分らんとする好意に出でたるものにして學業及施行の考查に關し目的各教科及び操行の注意の四項に分ちて説明し四五の府縣の右實施例を參考に掲げ以て兒童日々の學業操作の考查を全からしめんとし小學校令及施行規則を添へたるを以て勞を減じて功を收むるものと勿論卷末に附録として小學校令及施行規則を添へたるを以て勞を減じて功を收むるものと供せられよ

國語綴り方辞典

全一冊 製本優美
定價 金十錢
郵稅 金二錢

高等師範學校教授
長尾楨太郎先生校閱
古川喜九郎君著

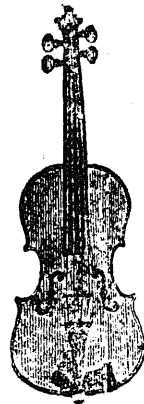
本書は著者が國語綴方を教ふる者及之を學ぶ者のために特に著されしものにして書中を分ちて「國語假名遣」「新字音假名遣」「類似的文字」「誤り易き熟語」「同訓異音の字」の六門とし之れに附するに美辭麗句集を以てす而して是に一々平易簡明なる解釋を施し且各門五十音別としたれば搜索に便なるは勿論國語漢字の使用法は一目の下に瞭然たりされば小學校中學校高等女學校及師範學校の教師學生諸君はもとより荷も文章を綴らんとする者は必ず一本を備へざる可からざるの寶典なり尙又本書は躰裁優美にして代價低廉なれば學校に於て生徒に與ふべき賞品としては恐らく此の右に出づるものなるべし

發行所

東京市本區橋本町三丁目二十二番地

金 昌 堂

●洋琴 金參百圓以上或千圓迄各種
 ●ウイオリン 鈴木製金五圓以上五拾圓迄各種
 舶來品金八圓以上百五拾圓迄各種



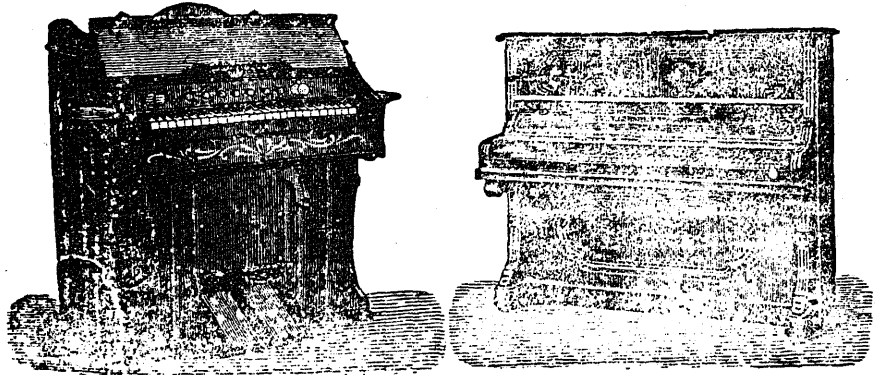
●手風琴

金貳圓五拾錢以上
 參拾圓迄各種
 定價金貳拾六圓五拾錢
 定價金拾七圓
 定價金拾八圓
 定價金拾九圓
 定價金二十圓

●山葉風琴

附險保
 式場用新形 定價金百參拾圓
 全一號形 定價金八拾五圓
 全二號形 定價金百拾圓
 全三號形 定價金百五十圓
 全四號形 定價金百八十圓
 全五號形 定價金二百圓
 全六號形 定價金二百三十圓
 全七號形 定價金二百六十圓
 全八號形 定價金三百圓
 全九號形 定價金三百三十圓
 全十號形 定價金三百六十圓
 全十一號形 定價金四百圓
 全十二號形 定價金四百三十圓

●右の外兩用風琴、吹奏琴ハ一モ
 ニカ、フラジヨールト其他各樂器
 并に和洋音樂書各樂器附屬品各種



明治三十四年二月六日內務省許可
 明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

告廣刊新

東京音樂學校編著
 ●中學唱歌 補裝全一冊定價金三洋
 洋裝美本全一冊定價金七拾五錢 郵稅不要
 山田源一 第二集 定價金五拾錢 郵稅不要
 洋裝美本全一冊定價金七拾五錢 郵稅不要

●女學唱歌 第一集 定價金五拾錢 郵稅不要
 第二集 定價金六拾五錢 郵稅不要
 洋裝美本全一冊定價金五拾錢 郵稅不要

●幼稚園唱歌 全一冊定價金四拾錢 郵稅不要
 洋裝美本全一冊定價金四拾錢 郵稅不要
 島崎赤太郎編

●オルガン教則本 一之卷定價金三拾五錢 郵稅六錢
 二之卷定價金五拾錢 郵稅八錢
 洋裝美本全一冊定價金三拾錢 郵稅不要

●遊戲 洋裝美本全一冊定價金三拾錢 郵稅不要
 石原重雄著

●小學唱歌教授法 洋裝美本全一冊定價金三拾五錢 郵稅不要
 北村或於作譜
 ●長編勸進帳 全一冊定價金壹圓 郵稅不要
 鈴木米次郎編

●舞蹈案內附舞蹈曲 洋裝美本全一冊定價金七拾五錢 郵稅不要
 ●ヒヤン調律修繕 郵券二錢 郵送附 目錄進呈